

岩国短期大学 紀 要

第 51 号
2022

目 次

新型コロナウイルス感染拡大時における大学教育の模索(2) —保育者養成校2020年度入学生の卒業アンケートから— 荒谷 容子・富田 雅子 ……………	1
デルサルト表情システムの日本における受容 —2代目市川左団次と白井規矩郎の受容の軌跡から— 井上 美佳 ……………	11
保育者養成校における歌唱指導の実践研究 —「歌うこと」についての調査からみた問題解決への考察— 赤川 優子 ……………	22
保育者養成校における壁面製作指導の一考察 —造形表現の授業実践研究— 向山 伊津子 ……………	32
研究ノート 保育学生の生物を取り扱う姿勢の変容 —学生の虫・小動物に対する意識調査を踏まえて— 水鶏口 陽一 ……………	38
子ども未来保育研究報告 基礎教養科目の効果の測定・評価に関する研究 —学習成果のデータ収集・分析を含んだPDCAサイクルによる自己点検・評価— 朝倉 なぎさ・正長 清志 井上 美佳・下山 希代子 ……………	47
令和4年度 卒業生対象保育実践研修会 報告 子ども未来保育研究所 ……………	58

新型コロナウイルス感染拡大時における大学教育の模索(2)

— 保育者養成校2020年度入学生の卒業アンケートから —

荒谷 容子・富田 雅子

Research into the Effects on Education at the University Level during the Spread of the Novel Coronavirus Disease (2)

— From the Graduation Questionnaire for Students Entering
the 2020 Class of Childcare College —

Aratani Yoko · Tomita Masako

The students enrolled in the class of 2020 reflected on their two years of life with Corona before graduation. The survey asked the following questions: 1. about the online class experience, (subjects that were easy to understand and accomplish in online classes) 2. about the level of concentration in online classes, and 3. whether learning communication technology through online courses will be useful in the future. In particular, 38.9% of the respondents answered "yes" to the question about the usefulness of learning communication technology in the future. 58.3% answered "don't know. For those who answered "yes," the methods of creating videos and meeting at a conference would be useful in the childcare field. The reason for not knowing may be that they do not yet have a concrete image of the job they will be doing. Listening to lectures was also raised as a subject that is easy to understand in online classes. These were infant care, psychology, and practical childcare. It was an interesting result.

キーワード：2020年度入学、オンライン授業、通信技術の習得

Key words ; Enrollment in 2020, Online classes, Mastery of communication technology

1. 研究の背景と目的

2023年現在、2020年に発覚した新型コロナウイルス感染症は、今なお第8波の到来だと言われており収束に至っていない。この3年間、2021年には新型コロナウイルス感染症の特効薬やワクチンの開発研究が進み、さらに2022年からは、新型コロナワクチン接種が開始した。個人や社会全体が新型コロナウイルスへの免疫を得る取り組みを講じながら、感染拡大の波を何度となく受けながら社会は「withコロナ」を目指して試行錯誤を重ねていっている。2020年から今日までの過程において、新型コロナウイルス感染症拡大防止策によって、教育現場にも激動の変化があった。感染拡大の脅威に、教育をどのように進めていくのかについて、各学校種においてICTの導入や教師の対応について議論が重ねられてきた。ここ数年間に緊急事態宣言が幾度となく発令され、その対象地域

に該当した本学においても例外ではなかった。

このような状況の中、教育関係者から時を急ぐかのように次々と調査研究の報告がなされている。新型コロナウイルスによる感染拡大防止策が始まった初期の研究を概観すると、大学生に焦点を絞った研究では、新型コロナウイルス感染拡大時における大学生の行動変容を調査した中西(2020)¹⁾や、コロナ禍での保育学生の意識を明らかにした荒谷・富田(2020)²⁾、遠隔講義受講に対する成果と課題を学生の視点から明らかにした樋山・橋浦(2020)³⁾、自宅待機を余儀なくされた学生の生活の様子や修学の態度、心理状態についての調査研究を行った山田(2020)⁴⁾などがある。この時期においては、学生の生活や意識、遠隔授業についての調査研究など、実態や状況を把握しようとする研究が多く見受けられる。そして、時間の経過とともにオンライン授業を実施することによる課題や可能性も見出されてきた。

鈴木(2021)⁵⁾は、「非対面授業の可能性と限界」と題して、子どもが学校や教室など限定した場所にいることによって様々なルールや固定された空間が設えられているからこそ学習メンバーにとっての学習に対する動機づけや学習効果について言及を行っている。オンライン上で仲間と会話を交わし意見を交換できたとしても対面で交わす授業には及びえない限界性を指摘している。また、坂本(2021)⁶⁾は、「オンライン教育の効果と課題」と題して、感染拡大初期におけるオンライン教育は学びを止めないという役割においては効果を発揮していたといえるが、それは、金銭的・時間的に余裕のある一定の人にとっての利益であったかもしれないと指摘する。感染拡大防止対策初期以降は、オンライン授業において学びの質をどう担保するかについて課題が残るとしている。そして、学びの場の境界線という見地から、オンライン教育はいつでもどこでも学べるという利点はあるものの、学びの空間や時間から逃げ出せない、逃げ出せる余地がないことに言及し、「日常生活の連続の中に学びが存在することは、スムーズに学びに向かうことができるが、スムーズに学びから離脱もできる」とし、世界を切り分けることが教育の効果を上げることにもつながっていたとし、境界線のない状況は、学びを狭めていることに繋がるとしている。

これら2020年当初の感染拡大防止策初期から現在の2023年に至るまでの間、研究動向は、現状把握に始まり、遠隔授業の成果と課題へと移り、その可能性について移行していると思われる。また、そのような研究動向の中でもパンデミック発生以後の興味深い研究として、コロナ禍の期間中に大学または短期大学での学びを修了し卒業していった学生、またはその期間を研究対象に限定してオンライン授業と対面授業を比較した宮里(2019)⁷⁾、まさにパンデミックの始まりに入学した2020年度入学生を対象として阿江(2022)⁸⁾などの研究がある。

これらの研究を概観するにあたり、保育学生を対象とした2020年度入学生に関する研究は官憲の限り多くはない。新たな大学教育、保育者養成の視座が求められ、多くの研究が蓄積されることが期待される今、本研究においても、大学生活をコロナ禍で過ごした2020年度生を対象とし、遠隔授業における成果と課題を明らかにし、保育者養成校における遠隔授業の可能性について検討することを目的とする。

2020年4月～2022年3月本学における非対面授業への対応

<オンライン授業の学校としての準備と実施方法>

教員は、学校が閉鎖している間、時差出勤を行い勤務にあたっていた。学内研修では、オンライン授業の構成や動画作成方法について行われた。授業時間は、通常の間帯で行われ、Classroomにより出席確認をし、授業終了後に授業の感想を求めるなどして授業参加による履修を担保するものとした。

2. 調査の方法

調査対象者・調査内容・調査時期と手続きに関しては以下の通りである。

(1) 調査対象者

I 短期大学幼児教育科卒業式直後の2年生。すべての項目において無回答、または、半分以上が無回答であるものを分析対象から除いた結果、36名を分析可能な研究対象者とした。

(2) 調査内容

コロナ禍における入学から卒業までの2年間の学生生活を振り返って、オンライン授業に関する学びについて、保育施設で働く保育者についてどのように感じているのか、さらに自身のキャリアへの展望などについて調査項目を作成し、選択式と記述式を混合した形式による質問紙調査を行った。

調査項目の詳細については、以下に示す通りである。

I <オンライン授業体験>

II <オンライン授業への集中>

III <オンライン授業のための通信技術の習得が将来に役立つか>

(3) 調査時期と手続き

2022年3月20日、卒業日にアンケート回答をグーグルフォームにて依頼した。

(4) 倫理的配慮

本調査は、個人が特定されないように無記名で行い、知りえた情報は、研究以外では使用しないことについて説明を行い承諾を得た。

3. 調査結果

以下にI～IIIの各調査項目と結果について記し、項目ごとに分析をおこなった。

I <オンライン授業体験>

表1 オンライン授業体験に関する項目とその内訳

質問項目	回答	(N)	(%)
① 対面授業に比べてオンライン授業は大変でしたか。N=36	はい	12	33.3
	いいえ	10	27.8
	どちらともいえない	14	38.9

<p>(a) どのような点が大変でしたか。(自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ラグが起きた時に先生の声が聞こえない。(3) ・集中はできるが一人で黙々とする学習のため、対面とは異なると感じた。 ・課題が多い(5) ・電波が悪いと授業が受けられない。(8) ・発表が緊張した。 ・ネット環境が悪い時に通知が来なくて期限に遅れてしまったり、画面が見えづらく指示が分からないことがあった。 ・分からない所を先生に直接聞くことができなかつたこと。(4) ・ICTの活用がなかなかうまくできずに、授業よりも大変でした。 ・meetの入り方。プリント写メ添付などがきちんと写メできていなかったりしたところ。 ・時間がつめつめだった。 ・グループワークなどが難しく、グループでの動画製作などの際には連絡がしっかり取れなくて大変でした。 ・質問がしづらい。大切なところが分かりづらい。 ・出席やテストなどの回答ができていのか分かりづらく何度も送信します。 ・ずっと動画視聴の科目は、手を動かしていないと対面の時よりも睡魔が来て大変でした。
<p>(b) どのような点が長所でしたか。(自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・移動時間が少ない。 ・自主学習が深められる。 ・自宅で受けられる。対面よりやりやすい。 ・動画なので見直せる。何度も復習ができる。 ・個人活動が多く、自分で考えたことを一人一人が発表できる。 ・家でも授業ができて生活リズムが狂わなかった。先生がスライドに大事な部分をまとめてあって聞き逃しがなかった。 ・直ぐに参加できる。 ・何をすべきか明確。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間や提出物の期限など対面授業の時以上に意識するようになった。 ・ meetでする方が授業に集中できる。 ・ 自分のペースで行える。 ・ 顔出しなしでできる。 ・ 体調が悪い日でも自宅から受けられるからインフルエンザの時などでも授業に出席できると思った。 		
② オンライン授業の方が理解しやすいと感じた科目はありますか。	ある	5	13.9
	ない	31	86.1
(a) あると答えた人は科目名を答えて下さい。 (自由記述)	実技以外 乳児保育、心理 実習指導 講義系 残っているので何度も見られること ないです		
③ オンライン授業で興味深く参加できた内容はどれですか。(複数回答可)	講義を聴く		44.4
	グループ討議		19.4
	小テストや確認テスト		19.4
	発表		16.7
④ オンライン授業では、学習の習得について達成感が高かったと思いますか。	はい	22	61.1
	いいえ	14	38.9

対面授業に対してオンライン授業の大変さについては、「どちらともいえない」が、全体の38.9%を占めていた。「はい」は33.3%で、「いいえ」が27.8%だった。自由記述によると、「はい」の大変さの理由については、電波環境の不具合（8）、ラグ（3）課題の多さ（5）、分からない時に直接質問ができない（4）、ICT活用（meetの入り方、添付資料送付、グループワーク、出席確認、テスト回答送信）、動画視聴が続くときの睡魔という回答だった。長所であった点は、移動時間が少ないこと、動画で見直しができること、時間や提出物の期限などの意識する、授業への集中、体調が悪くても自宅から出席できる点をあげていた。オンライン授業の方が理解しやすいと感じた科目については、「ない」が86.1%で、「ある」は、13.9%だった。

興味深く参加できた内容については、講義を聴くが44.4%、グループ討議、小テスト・確認テストはともに19.4%、発表は16.7%であった。さらに、学習の習得の達成感「はい」が61.1%「いいえ」は38.9%であった。

II <オンライン授業への集中>

表2 オンライン授業への集中に関する項目とその内訳

質問項目	回答	(N)	(%)
① オンライン授業期間中にあなたは規則正しい生活ができましたか。N=36	はい	30	83.3
	いいえ	6	16.7
② オンライン授業以外の課題学習の時間は増えましたか。N=35	はい	23	65.7
	いいえ	12	34.3
③ オンライン授業では緊張感がありましたか。N=36	はい	17	47.2
	いいえ	19	52.8
(a) はいと答えた人は、どのようなこと、どのような場面で緊張を感じましたか。自由に記述してください。(自由記述)	<ul style="list-style-type: none"> ・発表 ・ピアノを弾く時 ・課題提出 ・マスクを外す場面 ・発表をする時です ・きちんとメール等が届いているか心配でした。 ・みんなに身だしなみが見られる ・自分の部屋が見られたりするのが少し緊張した ・授業で次の質問が届かないときや電波が悪くなったときに焦りを感じました。 ・ピアノなどでは家で行うので、家族や近所に音の迷惑がかかってしまわないか緊張しました。 ・回答が送付できているかどうか ・顔が見えないからこそ、発表の際はより緊張した。決められたグループで討論する時はなかなか話に混ざれない。 ・講義を聞き逃さないようにする事 ・カメラをオンにして発表をする時。 ・きちんと音声が入っているかなどが気になっていました。 ・画面ごしですするのに緊張した 		
④ オンライン授業ではリラックス感がありましたか。N=36	はい	24	66.7
	いいえ	12	33.3
(a) はいと答えた人は、リラックス感についてさらに以下の項目であてはまる内容にチェックを入れて下さい。(自由記述)	図1		
⑤ オンライン授業では他者の意見に耳を傾けることができやすかったですか。N=36	はい	28	77.8
	いいえ	8	22.2

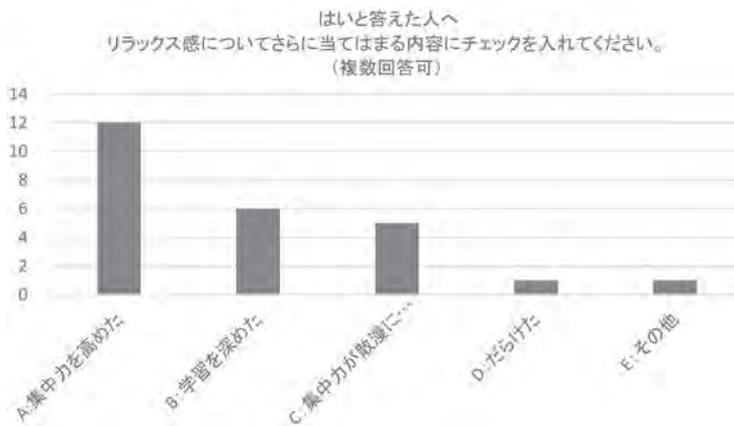


図 1

52.8%を占め、「はい」が47.2%だった。この質問項目のみ、「いいえ」が「はい」を上回っていた。逆にリラックス感は、「はい」が66.7%を占め、「いいえ」が33.3%だった。授業では他者の意見に耳を傾けられたのが、77.8%で、「いいえ」が22.2%だった。

Ⅲ <オンライン授業のための通信技術の習得が将来に役立つか>

表3 オンライン授業のための通信技術の習得に関する項目とその内訳

質問項目	回答	(N)	(%)
⑥ オンラインの受講のための動画作成やミーティング機能などの通信技術は、今後の自分のキャリアに役立つと思いますか。N=36	はい	14	38.9
	いいえ	1	2.8
	わからない	21	58.3
(a) はいと答えた人へ今後のそのキャリア場面とは、具体的に自由に書いてください。N=14	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育場面でのデジタル活用 ・ オンライン授業を受けなければわからなかった動画の作成方法などが知れたので今後も役に立つと感じた。 ・ 幼稚園での動画作成や編集（2）。meet 会議。 ・ スマホでも簡単にwordなどの機能が使えてこれから園だよりなどを作成するにあたってグラフなどスムーズに作れると思う。 ・ オンラインでの研修など ・ ICTの活用はどんどん増えると思うので、子ども達の管理だったり、保育内容に生かしていきたい。 ・ 就職先の園は、ipadを使って保護者の方と連絡を取り合うので通信機器の使い方をより理解することができた。 		

オンライン授業への集中として、オンライン授業期間中規則正しい生活ができたかについて「はい」が全体の83.3%を占め、「いいえ」は16.7%だった。また、時間の使い方について課題学習の時間の増加について「はい」が全体の65.7%を占め、「いいえ」が34.3%だった。気持ちの持ち方としてオンライン授業での緊張感について「いいえ」が全体の

<p>(a) はいと答えた人へ今後のそのキャリア場面とは、具体的に自由に書いてください。 N=14</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがいる家庭は、なかなか会議に参加できないが、meetを使って参加することができる。 ・将来就職してから、コロナ禍が拡大化し登園自粛になった時、子どもたちにオンラインでも保育ができるようにするため。
---	---

入学から対面授業に加えてオンライン受講のための通信技術習得が将来に役立つかについて「わからない」が全体の58.3%を占め、「はい」が38.9%だった。「いいえ」は2.8%であった。また「はい」の具体的なキャリア場面について自由記述によると、幼稚園での動画作成や編集（2）、オンライン会議（2）、オンライン保育、保護者との連絡、他、スマホでも簡単にwordなどの機能が使えてこれから園だよりなどを作成するにあたってグラフなどスムーズに作れると思うとの回答があった。

4. 考察

(1) オンライン授業の体験

オンライン授業の大変さについては、全体のおよそ4割近くが「はい」をあげており、理由に電波環境やラグの出現を一番多くあげていた。このことは環境による事由で、自身では解決することができない自己効力感が及ばない状態のことであった。次いで課題学習の増加による授業外学習の時間が増えたことを負担と感じるか否かは、個人の能力に係るところがあると予想される。そして、ICT活用の技術不足を上げていた。一方大変では「ない」や「どちらともいえない」とする回答は、6割強あった。そのことに関連する長所として、自主学习、自分のペースで見直せること等の学習に関する回答が述べられていた。学習に集中できた満足感があったのかもしれない。移動時間が少ないことや顔なしで受けられること、自宅で受けられることなどの効率化も長所にあげられていた。さらにオンライン授業の方が対面授業よりも理解しやすい科目として、実技以外や、乳児保育、心理、実習指導などの講義系が上げられていた。また、興味深く参加できた内容の内訳として、講義を聴くことが全体の半数近くを占めていた。この点は興味深い知見である。本学は保育者養成校であることから、教育目標として保育実践力の育成に特化したカリキュラムを組んでいる。そのことから学生の特質として、演習科目への興味関心が高い学生が多いと感じている。日頃から本学の保育学生にとっては、演習科目の方が身近に感じやすいと筆者らは捉えており、講義科目の教員は、講義科目は学生にとって理解しにくい科目と捉えていたのかもしれない。しかし、オンライン授業においては、図らずも講義系の科目が理解しやすい科目として挙げられていたのは、分からないところがあれば繰り返し視聴することが可能であること、分からないということを対面授業の時のように受講生の前で発言することなく解決する手立てがあることで理解しやすいと感じたのかもしれない。言い換えれば、自分のペースで自主学习を進めやすい環境であると言えるのではないだろうか。達成感が全体の6割が高いと回答していた点からもうかがえよう。また、オンライン授業でのグループ討議やテストについては、対面してなくてもオンラインで可能だったことに新鮮味があったのか

もしれない。

（2）オンライン授業への集中

オンライン授業への集中として、規則正しい生活がおくれたと8割強が回答している。また、課題学習時間も6割強が増えたと回答している。このオンライン授業期間はアルバイト等も禁止にしておき、不要不急の外出はしていなかったと思われる。授業には緊張よりもリラックス感が、6割強であり、他者の意見に耳を傾ける回答は8割近くあった。外出禁止などの行動制限があったことも、彼らにとっては授業への集中力を高め、授業で唯一短大とつながり、先生や他学生とのつながりを感じてむしろ安心感や連帯感を得ていたのかもしれない。

（3）オンライン受講のための通信技術の習得が将来に役立つか

動画作成やミート機能などの通信技術は、今後の自分のキャリアに役立つかについて「わからない」の回答が6割近くあった。学生には4月以降の就職先の仕事内容がイメージできていないものか。また、教育、保育関連の仕事でなければ習得が役立たないと捉えているのかもしれない。社会に出たら、学生時代のようなコロナ禍のための休講措置はないので、学びとしてのICTの活用はイメージできていないのかもしれない。入学直後からのオンライン受講はわずかであったが、その後は対面授業が可能になったことを踏まえると、2020年、2021年と短大祭などの行事は中止になったものの、その後は実習も行われ、2年間の仲間づくりもなんとかできていた。スマホなどもあり通信技術がより特別ではなく身近になったためにオンラインによるICT技術の経験値の有効性は薄まっているのかもしれない。また、動画製作編集を課題とする授業もあった。その場合は、仲間との共同作業であったことから、仲間がいてくれたので苦勞が分散されたことに由来するとも考えられる。加えて、オンライン授業による視聴は、自分から積極的に行動を起こさなくても受け身で授業が展開される部分も多く、将来の役立てまでには至っていないのかもしれない。

5. まとめ

オンライン受講を経験しその方法習得は、予想外の大きな技術習得であったと思われるが、アンケート調査の結果からは、大きく3点の特徴が明らかとなった。1つは、実技系の科目よりも講義系の科目の方がオンラインの受講が効果的であったということ、2つには、オンライン授業を集中して受けるに必要な規則正しい生活が送れていたということ、3つには、オンライン授業を受けることによって習得したICT技術を将来に有効活用できるか否かについて見通しが持てていないということであった。

前研究（富田・荒谷2020）⁹⁾では、子どもとの密接な関りを重要とする「保育者へのキャリア意識」を明らかにすることと共に、新たな生活様式での学校教育の創造、保育者養成校としての可能性の示唆を得ることを目的として、論を展開した。本研究の目的は、さらに遠隔授業における成果と課題を明らかにすることであった。結果3点からは、保育者養成校のオンライン授業において、学生に受け入れやすい科目と集中に関する回答から、遠隔授業の成果はある程度見出されたと考える。また、ICT技術習得が将来に役立つかどうか見通しが持てていない点も明確になった。しかし、こ

の点は、保育学生に限って見出されたことなのかもしれないし、学生の専門性によることなのかもしれない。この点については今後のさらなる検討課題である。

現在は多くの大学で、対面授業とオンライン授業の双方の長所を活かした授業が行われている。本学においても、貴重なオンライン授業のから得た知見を元に、保育者養成校に見合った独自性の高い効果的な授業研究に生かしていきたい。

引用文献

- 1) 中西晶 (2020) 第11回横幹連合コンファレンス予稿集
- 2) 荒谷容子・富田雅子 (2020) 「コロナ禍に関する保育学生の意識－4月と11月のアンケートから－」第72回中国四国教育学会発表要旨
- 3) 樋山淳雄・橋浦弘明 (2020) 「新型コロナウイルス感染拡大に伴う遠隔授業受講に対する学生の視点からの成果と課題」『東京学芸大学紀要』自然科学系72 125-130
- 4) 山田一之 (2020) 「失われた1か月－学生は自宅待機をどのように過ごしたか－」『静岡産業大学論集』環境と経営26-2 93-101
- 5) 鈴木篤 (2021) 「非対面授業の可能性と限界」『教育と医学』no.805 慶応義塾大学出版会 pp20-27
- 6) 坂本将暢 (2021) 「オンライン教育の効果と課題」『教育と医学』no.805 慶応義塾大学出版会 pp12-19
- 7) 宮里心一 (2021) 「2019・20年度の学生アンケートに基づく対面授業とオンライン授業の学習状況の比較」KIT Progress No.30 001-007
- 8) 阿江美恵子 (2022) 「コロナ禍による大学オンライン授業と大学適応について－2020年度の大学入学生について－」東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第57号67-75
- 9) 富田雅子・荒谷容子 (2020) 新型コロナウイルス感染拡大時における大学教育の模索 (1)－保育学生のコロナ禍への関心と生活の変化に着目して－ 岩国短期大学紀要第49号

デルサルト表情システムの日本における受容 — 2代目市川左団次と白井規矩郎の受容の軌跡から —

井上 美佳

Acceptance of the Delsarte System of Expression in Japan — From the Trajectory of Acceptance of Ichikawa Sadanji II and Kikuo Shirai —

Inoue Mika

The purpose of this study was to clarify one aspect of the reception of the Delsarte System of Expression in Japan during the Meiji and Taisho periods and the early Showa period. First, we summarized previous research on the expression system devised by Delsarte. As practitioners in Japan, I focused on Sadanji Ichikawa II and Kikuo Shirai. These two are documented to have spread Delsarte's facial expression system in Japan during the Meiji and Taisho periods. The first, Sadanji Ichikawa II, was a Kabuki actor. As an actor himself performing Western theater, he was searching for a method. He believed that a theatrical method different from the one used in Kabuki was needed. He went to the West and attended theater schools in various countries. Among them, he adopted the Delsart system of expression and used its curriculum for actor training in Japan. This article will explore how Sadanji accepted Delsarte's expression system from the records of his training.

Next, we turn our attention to Kikuo Shirai. He was a teacher. We infer that he learned Delsarte's expression system, which was popular in the U.S., from books. He practiced in Japan for the next 20 years, and in 1923 wrote a book about his practice and the expression system. From the book, I will discuss how Shirai accepted Delsarte's expression system. The purpose of this study is to clarify whether or not the expression system that are said to have been practiced by Kikuo Shirai and the Delsarte System of Expression show the same content.

キーワード ; フランソワ・デルサルト、デルサルト表情システム

Key words ; François Delsarte, Delsarte System of Expression

I はじめに

エミール・ジャック・ダルクロゼÉmile Jaques-Dalcroze (1865~1950) が創案したリトミックは、もともとは、音楽的感覚を養う為の基礎的な音楽教育方法として始まった。その修得形態がリズムを身体の動きによって捉えることから、体操や舞踊、演劇へと影響を及ぼす「身体表現システム」へと変容していった。これは、その時代時代、また取り扱う実践者や研究者によって「リト

ミック」を様々な角度で取り扱ったことや、横断的な解釈がされなかった為に、言葉や内容の概念を不明確にしてしまったとも解釈できる。

「韻律體操と表情遊戯」(1923)はダルクローズのリトミックを日本に紹介した書籍として知られるが、著者である白井規矩郎はリトミックよりも先に「表情遊戯」を実践していたことを拙稿で明らかにした(井上、2021)¹⁾。江間(2003)は、「韻律體操はジャック＝ダルクローズのシステムを指し、表情遊戯はデルサルト(1811～1871)のシステムを指す。」²⁾としている。このデルサルトとは、フランソワ・デルサルトFrançois Delsarte(1811～1871)のことであり、俳優のための身振りと発声を中心に据えた表現システムを考案したことでその名を知られている。デルサルトの表情システムについては、武田によると、「デルサルト・システムは、実はわが国に明治42(1909)年には既に紹介され、導入されている。紹介したのは2代目市川左団次である。」³⁾とされている。しかし、板野は、「白井はデルサルトの方法を1901年に『新式表情遊戯 1』、1903年に『新式表情遊戯 2』を訳出してから20年来、女子教育において表情遊戯の指導と普及にあたってきた。(中略)歌の歌詞を身体の動きで表現する表情遊戯と、音楽のリズムを身体の動きで表現する韻律體操とを1冊の本の中に並列して紹介している(後略)」⁴⁾と述べている。デルサルトの表情システムについての先行研究はまだまだ少なく、白井が、1901年からデルサルトの考案した表情システムを実践していたかどうかは明らかになっていない。そこで、本論文では、デルサルト表情システムを最初に演劇に受容したとされる2代目市川左団次の実践記録から、どのように受容し実践したのかを考察する。次に白井がはっきりと「韻律體操と表情遊戯」の中で、デルサルトを「表情體操の創始者」として紹介をしていることから、白井規矩郎が研究・実践したとされる「表情遊戯」と「表情體操」の概念やデルサルトの表情システムとの相違点について明らかにしていく。

II 目的・先行研究

本研究は、明治・大正時代から昭和初期の日本でのデルサルト表情システムの受容に関する一側面を明らかにすることを目的とする。本論文では、最初にデルサルト表情システムを日本に最初に紹介したとされる2代目市川左団次の実践記録を元に、その受容形態の実際を考察する。次に「韻律體操と表情遊戯」(1923)の原文から、白井規矩郎が実践したとされる表情遊戯とデルサルトの「表情體操」「表情システム」が同じ内容なのかまたは形を変えた受容なのかを明らかにしていく。

2代目市川左団次については、その洋行のことやその後の演劇界への貢献など、書籍や研究はある。しかし、デルサルトの表情システムをどのように受容したのかという点については、先行研究は少ない。よって、歌舞伎や演劇のインタビューや書籍の中の記述を元に資料を集めた。

白井規矩郎は大正期の表情遊戯実践者である。彼は明治時代にいち早く海外で実践されていた身体表現に注目した。先行研究において彼が翻訳にも長けていることが明らかになり、著作リストも作成されている。また、表情遊戯については、その後大正時代の遊戯研究の中心人物である土川五郎の研究が盛んである。また、白井規矩郎の体育教師としての取り組みについての先行研究も散見された。デルサルトの表情システムについては武田氏の研究が詳細であり、白井が「表情體操」や

「表情遊戯」と紹介したという先行研究は少ない。日本に紹介された当時の指導書をみても、純粋な「動き」を文章で説明するという、ハウツーに特化しており、本格的な討論はない。しかしながら、皆無ではなく、特に体操界では「女子体育」や「新体操」などにおいて、「舞踊の基礎」「女子の体操の基礎」などという括りで身体表現については発展していったとみられる。

白井規矩郎は日本女子大学の初代体育教師であるが、当初は音楽教師であり、非常に多くの唱歌遊戯作品も残している（堀江、2013）⁵⁾。音楽と体育の両側面の見解を持つ研究者として、表情遊戯を研究対象とし、デルサルトやダルクローズに注目し書籍を残したことは、大正時代から昭和初期の日本での海外の身体表現法の受容に関する一側面が明らかになると期待し研究に取り組む。

Ⅲ 方法

本論文では、デルサルト表情システムについて先行研究をまとめる。日本におけるデルサルト表情システムの受容については、最初に紹介したとされる2代目市川左団次を取り上げ、彼が洋行で学んだとされるこのシステムを彼自身がどのように理解し実践していたのか、演劇界にどのように受容されたのかという点について、実際の書籍やインタビュー記事から考察する。

次に拙稿で触れた白井規矩郎が著書で紹介し実践したとされる「表情体操」や「表情遊戯」を「韻律体操と表情遊戯」（1923）の原文から分析する。デルサルトの表情システムとの関係を考察し、日本での受容について一側面を考察する。

Ⅳ 研究内容・考察

1. フランソワ デルサルト François Delsarte (1811~1871) について

フランソワ デルサルトは、俳優のための身振りと発声を中心に据えた表現システムを考案した。本人は演劇人ではなかったようだが、俳優の演技による表現方法の訓練を西洋演劇史上はじめてシステム化した。彼の表現システムは19世紀後半の欧米の演劇界に広く普及し、俳優訓練の基礎を築いた。俳優学校では訓練の基礎として取り入れられていた。20世紀には舞踊史上では、イサドラ・ダンカンなど第一世代の舞踊家を輩出した時代になる。ここでも近代の演劇と舞踊双方の身体訓練法の基礎となった。

2. デルサルト表情システムについて

「デルサルト表情法」は、デルサルトが身体表現の方法を考案して、一つの体系にまとめ上げたものである。デルサルトが亡くなる前にアメリカの演出家スティール・マッケイ（1842~1894）がデルサルトに師事し、デルサルトのシステムを研究した。しかし、マッケイは1894年にデルサルトのシステムを発表できないまま亡くなる。19世紀末の10年間に続々と出版された「デルサルト・システム」や「デルサルト・メソッド」はほとんどマッケイの弟子たちが著したものである。その中でもマッケイの下で2年間学んだジュヌヴィエーヴ・ステビンズという女性が出版した「デルサルトの表現システム」（1902）がアメリカに広く普及した。

「デルサルト・システムは人間の身体各部の運動を、表情や発声に至るまで分節化して、個々にその表現の方法や特徴や意味を学んで、それからそれらを長期にわたる練習によって総合していくものであった。」⁶⁾「デルサルト・システムで規定された個々の姿勢 (attitude) や身のこなし (bearing) や構え (poise) には、各々特定の感情や意味が付与されている」⁷⁾。デルサルトは演劇人を目指していたのではなく、少年時代はオペラ歌手になるという夢を持っていた。しかし、当時の徒弟制度による過度のレッスンや偏った発声法から身体を壊し、夢を断念せざるをえなくなった。デルサルトは、自分に起こったような悲劇が二度と繰り返されないように、芸術とその表現の原理と法則を発見するために、研究を始める。芸術の実践を支える何の理論もないことが自分に起こった悲劇の原因であると考えたのであろう。丁度、19世紀の科学主義的な傾向もあり、彼は芸術を他の諸科学と同じように公式化することができるはずだと考えた。具体的には、「デルサルトは世の中で実際に人々がどのように動作し、反応し、話しているかを正確に、できる限りその場その場の感情と関わらせながら観察し、解明しようとした。以後15年間にわたって、彼はあらゆる年齢層、あらゆる社会的地位、あらゆる性格類型の人間の、情緒的刺激に対する反応を観察して、膨大なデータを収集した。そして冷静な科学者の態度でそれらのデータを分析した結果、彼はそこから取り出した身振りと発声と表情の法則が数学の公理と同じほどに正確であると確信した。」⁸⁾。

デルサルト自身は何一つ著作を発表せずに亡くなった。その後継者にデルサルトの考案した表情システムは継承されていく。その中の一つ、ステビンズが表現システムの実践としてまとめた体系を以下に紹介する。

- レッスン1 身体分節化 (緊張を解く) [Decomposing Exercises]
- レッスン2 調和のとれた身のこなし [Harmonic Poise of Bearing]
- レッスン3 三位一体の原理 [Principle of Trinity]
- レッスン4 脚 [The leg]
- レッスン5 歩行 [The Walk]
- レッスン6～8 手 [The hand]
- レッスン9～11 腕 [The Arm]
- レッスン12 胴体 [The Torso]
- レッスン13～14 頭 [The Head]
- レッスン15 眼の活動的動因 [Active Agents of the Eye]
- レッスン16 横顔 [Profiles]
- レッスン17 唇と顎 [The Lips and the Jaw]
- レッスン18 パントマイムの文法 [Grammar of Pantomime]
- レッスン19 パントマイムにおける表現範囲 [A Gamut of Expression in Pantomime]
- レッスン20 声 [The Voice]
- レッスン21 色彩

デルサルトは、「多くの人間の、感情と結びついた動作・反応・姿勢を観察した結果、その理想

の典型を古代ギリシャの大理石のなかに発見した」⁹⁾。デルサルトは彫刻のポーズを取る (statue-posing) という方法を策定した。上記のレッスン1「身体分節化」は、現在でもモダンダンスの基礎練習の中にみられる。しかし、今はそれをデルサルトの表情システムだとは紹介されずに実施されている。武田がデルサルトの理論を要約した文章を紹介している。「彼 (デルサルト) にとって人間の経験と行為とは、身体的、精神的それから心霊的とに分割され、そしてこれらの三つの局面が順番に各々の行為、思考、情緒へと関連づけられる。彼はまた、身体をもいくつかの部分へと分割ないし細分化し、そして各々を身体的、精神的、心霊的な領域へと関連づけた。最後に彼は一つの精巧な図式にたどり着いた。これによって彼は、足、脚、腕、胸、頭などの身体の部位が、特別な感情や態度や思考を伝達しながら用いられるようになることを記述しようとした。これが現在、デルサルト・システムについて得られる最良の解説である。」¹⁰⁾ これらが実践的練習の場面でどのように具体的な応用をされているかを記述することが最も難しいとも述べている。デルサルト・システムの解説ではそれが省略されているという。ステビンズはデルサルトのシステムを手軽にまたは迅速に身に付けようとするから機械的なわざとらしさになってしまうと警告しているが、デルサルトのシステムがもてはやされる時期、入門した多くの者が同じ傾向にあった。デルサルトのシステムの特徴は身体表現を記号の体系であると考え、 3×3 の9マスからなるチャートを示している。形式と感情、外部と内部の関係にいて厳密な適合の科学=美学と記号学を打ち立てるために徹底的に細分化していくのである。

19世紀から20世紀初めの約20年間、デルサルトのシステムは大ブームを呼ぶが、その後急速に忘れられた。武田は原因の一つとして「システムの実践的側面がプラグマティックに捉えられすぎた」¹¹⁾としている。デルサルトコルセットやデルサルトチェアまで販売されたようだ。デルサルトが繰り返し強調したシステムの理想的側面が無視されると、デルサルトの表現システムは単に9つの脚のスタンスと身振りと表情の組み合わせをするだけになってしまう。人間の行為を図式化しそれを機械的な演技に陥った後継者が実践するという流れが不評となったのであろう。

しかし、武田は次のように分析する。「デルサルト・システムの訓練の基本的要素は今でも十分使えるのである。それは彼の訓練が身体の緊張緩和、正しい姿勢、正しい呼吸法、無理のない発声、俳優を一つの楽器として鍛えるべく計画されたエクササイズから始まっているからである。」¹²⁾「デルサルトが演技者へ精神面を育てること、精神的特質を大きくすることを絶えず促したことである。テクニックの習得だけに気を取られ、精神面を発達させるのを疎かにすることがないように彼は絶えず学生に呼びかけた。」¹³⁾そして、デルサルトのシステムを書籍に残したステビンズは次のような言葉を実践者として残している。

「芸術の目的に対して立派に応えるには、われわれがその至上の原理を凝視するに至るまで、すなわち美、真、善の源それ自体に達するまでわれわれの精神と心を引き上げるのです。」¹⁴⁾

あくまでも、身体の分解法は準備段階であり、次のステップである身体表現の「記号学」が重要なのであろう。俳優は身体の各部位ごとにその表現法則を習得し、その後統一していくのである。表現法則というのが、身体の動きを9つの基本形に分類しそれぞれの動きを基本形に当てはめ、意

味する感情を特定するというものであり、俳優は意味が特定された動きを組み合わせることによって具体的な場面での表現に到達できる。これを武田は「記号学」と論じていると解釈できる。つまりデルサルト・表情システムとは、まず身体の分解方法によって柔軟な身体を準備し、身体の「記号学」を身に付けることによって具体的な表現を目指すといえる。

3. 2代目市川左団次が取り入れた「デルサルト表情システム」

武田は、「デルサルト・システムは、実はわが国に明治42（1909）年には既に紹介され導入されている。紹介したのは2代目市川左団次である。」³⁾としている。しかし、村山は『新式女子表情体操』第1集ではデルサルト（本文のまま）の理論、デルサルト式体操及び白井が創案した表情体操が紹介されている。¹⁵⁾と記している。白井が1901年、1903年に紹介していたということは、ステビンズ以前の書籍を翻訳・参照した可能性がある。白井が紹介したデルサルトの表情システムと2代目市川左団次が紹介し実践したデルサルトの表情システムとはそれぞれどのようなものであったのだろうか。まず、2代目市川左団次が取り入れた「デルサルト表情システム」について考察する。

日本人として最初にリトミックを体験したとされる2代目市川左団次（1880～1940）は、明治39（1906）年12月から翌年、明治40（1907）年にかけて洋行している。2代目市川左団次は演劇だけでなく、オペラ、レビューなど様々なジャンルの舞台を観ている。観劇だけでなく、役者との交流や演劇学校の訪問も経験した。訪問国はフランス、ドイツ、イギリス、アメリカである。イギリスでは、ピアボーム・トリーが1904年に設立した王立演劇学校（Royal Academy of Dramatic Arts、通称RADA）に約3週間通い、表情術や発声法を学んだ。当時、この学校には様々な学科があり、雄弁法、舞台稽古、身振（パントマイム）、舞踊（ダンス）、バレエ、剣術（フェンシング）、化粧法、イギリス演劇史、脚本の実演も見学したという。フランスのパリやニューヨークの演劇学校も短期間ながら訪れている。左団次と一緒に洋行したのが松居松翁（1870～1933）である。彼も同じイギリスの演劇学校へ通っていることから、当時の俳優の訓練法を見聞したのではないかと考えられる。

2代目市川左団次は、当時のヨーロッパの近代劇を上演し、日本における新劇を広めたが、上演にあたって彼の最大の悩みは翻訳劇を演じる技術が追いつかないということであった。演技技術の修得のためにデルサルト表情システムとリトミックを採用した。実際に2代目市川左団次の文章を以下に引用する。

「こういう種類の劇を演ずる技術の方法が、わが国にはまだ全然準備をされていなかった。われわれの歌舞伎劇の演技法を以ても出来なければ、当時の所謂新史劇の演技法を以ても不可能であれば、また所謂新派の演技術を以ても表現できるものではなかった。こういう種類の劇を演ずる根本の演技法そのものを研究樹立しなければならぬと同時に、そういう方面の名作を演じようというのであるから、実際、その苦心は一通りのものではなかった。」¹⁶⁾

左団次の回想から感じることは、演技術がないということはどういうことか、という点である。

この点について、武田は「演技術がないということは、実は俳優の身体がないということである。洋服を着て、どのような姿勢で舞台に立ち、歩きさえすれば、ヨーロッパの近代劇中の登場人物らしく見えるのか、洋行帰りの左団次以外の歌舞伎役者には皆目見当がつかなかったはずである。」¹⁷⁾ もちろん、歌舞伎役者以外の舞台演劇役者の誰もがわからなかったと想像できる。左団次は、俳優の身体に注目し、ヨーロッパで学んだデルサルトの表情システムと、ダルクローズのリトミックを一門の歌舞伎役者に教えたという。彼がデルサルトの表情システムを説明している記述がある。「それはデルサルトの発明した方法をフランスで修業した女の教師であって、人体の運動を一旦できるだけ白紙程度にして、それから初めて個々に教えて行くのであって、四肢の運動、顔面の運動等を別々に教え、それを悉く修業してから統一をさせるのである。」¹⁸⁾

武田は「左団次の理解したデルサルト・システムは、3週間しか教わらなかったにしては、システムの真髓を結構うまくつかんでいる」¹⁹⁾と評している。デルサルトのシステムは先述したように、長期にわたる練習が必要である。左団次は身体の運動を一旦白紙にしてと述べているが、これは身体の各部位を順々に解放し（力を抜くような感覚？）関節を柔軟にする段階の練習を指していると察する。詳しい訓練内容を左団次から訓練を受けた歌舞伎役者の一人が次のように振り返っている。「デルサルト式表情術というのがあります。これはフランスのオペラ歌手デルサルトが考案したもので、せりふをいわず、手ぶりや身ぶりで、ことばや態度を表現する表情術で、いわば最新流行のパントマイムです。発声法も今までの歌舞伎と違ってのみ込むのに骨が折れました。」²⁰⁾ この記述からは、デルサルトの表情システムの解釈内容が読み取れる。「せりふをいわず、手ぶりや身ぶりで、ことばや態度を表現する」という記述は、パントマイムと書かれているが、これは、そのまま練習方法であると推測される。デルサルトのシステムで規定されている姿勢が、感情や意味が付されているからである。

さらに、左団次と一緒に洋行した松居松翁は、「身体によって内面を可視化させる」と理解し、言葉が違って仕草や表情で人はその意味を表すことができるという演技観・身体観を強烈に覚えていたようである。松翁は、デルサルト・システムを「各部の配列によってタイプライターのように人情を表現できるものと考えており、その記号学についてもかなりの確に理解している」²¹⁾。しかし、左団次のデルサルト・システムの稽古についての記述には身体の分解法についての記述ばかりで、「記号学」についての記述は見当たらない。「内面を可視化する身体という発想と身体の分解法は受容しながら、「記号学」については取り入れなかった可能性もある。」²²⁾

松翁は、デルサルト表情システムの中で身体の分解法について感銘を受けたのだろうか。この後の時代、日本では身体の分解法だけがデルサルト表情システムとして広まった。同時代の演劇界の要人小山内薫も左団次の教えたデルサルトシステムについて「役者たちの筋肉体格をその畸形的な発育から本来の自然に戻そうとするものであった」²³⁾とし、その目的が変容していることがわかる。デルサルトの表情システムにおいて、身体の分解法は準備段階である。あくまでも身体の緊張をほぐすことを目的とし、その次のステップで行われる真の目的へと進むのである。この運動だけでは、具体的な表現に到達することはできない。

4. 「韻律體操と表情遊戯」(1923)で論じられているデルサルト表情システムについて

1923年、「韻律體操と表情遊戯」を著している。白井は、この「韻律體操と表情遊戯」中で、デルサルトを「表情體操の創製者」として紹介をしている。白井は、日本にいながらデルサルトに関する書籍を読み、実践していたということになる。唱歌遊戯研究の延長で欧米の女子体操にも興味をもっていったということだが、研究初期の著作は理論的説明ではなく、遊戯の方法や譜例を掲載した作品集という形態であった。彼の著作に示されたものは、実際に欧米で直接指導を受けた経験に基づくものではなく、体操教育・遊戯教育の理論的背景の一つとして、ダルクローズやデルサルトのアイデアを採用したものと推察される。

では、具体的に「韻律體操と表情遊戯」にはどのようなことが記されているのだろうか。当時の音楽教育や体育教育の一端を知る貴重な資料である。また、白井自身のデルサルト表情システムの解釈を知る手がかりとなる。以下に、原文を挙げながら、記述について考察する。

「韻律體操と表情遊戯 白井規矩郎著 第1部 表情遊戯

(デルサルト式)運動を主とする表情遊戯は表情體操の一部である、表情體操は佛國のデルサルト氏が創製考案せられた方式で總ての動作に或る何等かの意味を有たせて行ふのが主眼である。」²⁴⁾

白井は、「表情遊戯は表情體操の一部である」と捉えていることがわかる。表情體操をデルサルトの表情システムだとし、表情體操は全ての動作にある何らかの意味を持たせて行うことを目的とする、と説明している。

「平素我々は一挙手一投足と雖決して無意味に行ふものではなく必ず何等かの要求目的があつるのである。夫故體育の一手段として體操するのにも唯だ無意識に手足上體を働かすよりも夫れに何等かの目的を以てして行ふといふ事は、其運動の局部に精神も籠り従て血液循環の上にも数倍の効果があるのである。」²⁵⁾

この解釈については、体育の目的にも触れているため、本来のデルサルトの目指す表情システムの効果にはない部分が含まれている。意味を持って身体を動かす上で、目的はあくまでも表現であるからである。

「(曲線運動)表情體操は曲線的の動作が主である、それは我々の身體は全て曲線の集合から成立て居るのであるから運動を曲線的に行ふといふ事は自然の法則にも適ひ、特に容儀を修整するには直線的の運動を主としては不可能であると云はれて居る。」²⁶⁾

デルサルトの表情システムは、どちらかというとな力を抜いた身体をまずは分解するように一つ一つ解放するのだが、その身体表現は曲線的に見えたのであろうか。または、当時の体育の力を入れた直線的な動きと相反することを表現しようとしたのかもしれない。この部分は、体育との比較になり、デルサルトの記述を翻訳したかどうかは不明である。

「(容儀體操)夫故欧米に於ける俳優とか演説家とか又た表情を主とする職業のものなどは、先づ此のデルサルト式の方法を容儀體操の一として学習するのである、この容儀體操を習得すると自己の意志を自由に容貌手指上體で表情出来るので、之れに加ふるに適當の言語を以てす

るのであるから観者聴者も一層其感を深くする次第である。」²⁷⁾

この箇所の「容儀禮操」と「容儀體操」の使い分けをしていたのかは不明であるが、「禮操」はここにのみ使われている。俳優などの演技者に必要な技能であることが述べたかったのだろうか。自分の意思を自由に身体や表情で表現できるという理解が伺える。

「(年齢相當の表情) 表情體操とか表情遊戯とかいふと如何にも込み入った運動の様に考へられるが、決して左様なものではなく簡単なものもあれば複雑なものもあるので、尋常一二年生徒に容易に出来る動作もあれば又た女学校の上級生にでもチト六ヶ敷いといふ様なものもある、以前に一寸行はれた表出遊戯とか又た唱歌遊戯なども一種の表情運動である。」²⁸⁾

「表情體操」はデルサルトの表情システムで、「表情遊戯」は「表情體操」の一部である、と先述してあった。「表出遊戯」とか「唱歌遊戯」は一種の「表情運動」である、とは、ダンスなどに発展する音楽に合わせて踊る「遊戯」は身体を動かす身体表現であり、これを運動と意味づけしていると推測される。日本では表情遊戯についての論争が起こるが、子どもらしい表現・表情も論点になっていることから、白井の考えを示したとも考えられる。

「(心身に及ぼす影響) 要するに表情的の運動は或る一定の法則の下に組立てられてある醇雅端正のものなれば、體軀を訓練し併せて美的情操を涵養するに尠なからざる効あるものである。

(表情遊戯と歌) 表情遊戯は概して韻文若くは唱歌に依て動作をなし、其歌意を闡明展形するのである。故に先づ始めに十分能く其歌意を了解せしめて然る後に運動に着手する順序として居る。

又た表情は決して枝葉の細末に拘泥しないで其根幹を正しく明瞭に發顯するのが第一である。

併して漸く愈より細に単純より複雑に導く様にせられたい。」²⁹⁾

「ある一定の法則」を白井自身がわかっていたかどうかは不明であるが、これが表情システムの指す「記号学」であれば、かなり解釈ができていたことになる。この箇所でも「表情遊戯」についての解釈が出てくるが、これは、デルサルトの表情システムには含まれていない。この「表情遊戯」は、白井自身が研究テーマにしていた当時の日本の「表情遊戯」について述べているのだと推測される。

この後は、所謂「表情遊戯」の動作の詳細について書かれている。よって、理論の考察はここまでとする。白井は、柔らかい動きを「曲線」と表現したり、自然な動きをデルサルトの表情システムに見出したと推察できる。自らが考案した遊戯理論をデルサルトの表現システムに求めたともいえる。白井が目したデルサルトの表現システムは、体育界では、ドイツ式・スウェーデン式体操の反動として再認され、米国経由で日本に入ってきたようだ。弛緩が重要とされるデルサルトの表情システムを「柔らかい動きの体操」と据え、自己の遊戯研究に反映させたと推察できる。実際に、デルサルトの考案した理論はアメリカで影響力をもち、モダンダンスの基礎となった。

V 今後の課題と展望

実際に、2代目市川左団次の残した指導方法のように、デルサルトの表情システムを日本へ受容

した形跡が白井には見られなかった。理論の端々にデルサルトのシステムを指す内容が見られるが、核心を得ているとは言い難い。それに比べ、2代目市川左団次や松井松翁は、演劇人としてもデルサルトの目的の一端を理解していた形跡がある。しかし、デルサルトの本当の意図した部分を受容していたとは言い難く、残念ながら本当の表現方法には行きついていない。

白井の著書では「巻頭に一言」という表題で以下のような文章が続く。

「遊戯や體操は他の事項と異ひまして順次活動的に運行するものであります爲め、之れを文筆に記すのは中々困難で詳に過ぎては反て煩雜を來たし、略に失しては其正鵠を求むるに容易ならざる憾あります、自身が研究して親しく学生に試み之れを訂正して較々理想に近いものとするのは左のみ困難ではないのですが、扱て是を未だ一回の實演をも見られざる方に對して自分が行ひつつある處を參觀せられたと同様に首肯するを得らるるまでに記述することは極めて難事なのであります。それも普通の體操やダンスなれば未だ宜いですが、表情體操韻律體操に到りましては断片的の動作は僅かです、主として連續的の動作で組織せられてあります故、或る動作から次の動作へ移る工合が多種多様になって居ります、假令ば手を上るにしても前からするのあれば側からするのもある斜もあるといふ鹽梅で、結局は頭上へ伸ばすにしても其経路は場合に依て一定して居りません、併し夫れまでを細説するといふ事になりますと、如何にも煩雜で肝腎の主とする動作が何れにあるかがわからなくなるので省きましたが、此の動作と動作間の連鎖は適當なる考慮を拂はれたいのであります、尤も多の場合は曲線的に圓滑に自然に逆らはない様にさへ進めば宜いのでありますから、其積で試みられたらば必ず工合よく出来ることと思はれます。(原著そのまま)」³⁰⁾

動作を文章で示すことの限界を感じていることや、言葉の表現を詳細にしすぎてしまうと本来伝えたい動作が何だったかを置き去りにしてしまうという著者としての悩みが書かれている。この後は、「本書に使用せし特別の語に付て」として、著書中の言葉の示す動きの概念がまとめられている。裏表紙には「質疑券」が添付してあり、わからないことは筆者に直接連絡するようにと記してある。当時の様子が垣間見えるが、欧米の成熟した様々な理論書を以て、それを受け入れる土壌が当時の日本にどの位あったのか、想像はできないが、理論への探求心を持ちながら、どれだけ理解し実践できたかはまだまだ研究の余地がある。

引用文献・参考文献

- 1) 井上美佳、「白井規矩郎と天野蝶のリトミックー日本のリトミック受容期前史Ⅱー」、岩国短期大学紀要第49号、2021年
- 2) 江間孝子、「日本におけるリトミック教育の概念に関する諸問題」、日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集 リトミック研究の現在」、開成出版、2003年、p.71
- 3) 武田清、「デルサルトの表情システムについてⅠ」、明治大学文芸研究会、文芸研究(81)1999年、p.100
- 4) 板野晴子、「白井規矩郎によるリズムに合わせて行う身体運動教育についての研究ー日本への

- リトミック導入史の一端を探る—」、ダルクローズ音楽教育研究vol.39、2014年、p.22
- 5) 堀江遙、「明治期における白井規矩郎の唱歌遊戯教育観」、広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要XXV、2013年
- 6) 上掲書3、p.101
- 7) 上掲書3、p.102
- 8) 上掲書3、p.104
- 9) 上掲書3、p.107
- 10) 上掲書3、pp.111-112
- 11) 上掲書3、pp.119-120
- 12) 上掲書3、p.120
- 13) 上掲書3、p.120
- 14) 上掲書3、p.120
- 15) 村山茂代、「白井規矩郎の表情体操と桃太郎」、舞踊学1995巻18号、1995年、p.55
- 16) 上掲書3、p.101
- 17) 上掲書3、p.101
- 18) 上掲書3、p.101
- 19) 上掲書3、p.101
- 20) 上掲書3、p.102
- 21) 笹山敬輔、「洋行と演技術—抱月・松翁・左団次—」、文学研究論集29号、2011年、p.22
- 22) 上掲書21、p.22
- 23) 上掲書21、p.22
- 24) 白井規矩郎、「韻律體操と表情遊戯」、敬文館、1923年
- 25) 同上書（古書のためページ印字なし）
- 26) 同上書
- 27) 同上書
- 28) 同上書
- 29) 同上書
- 30) 同上書

保育者養成校における歌唱指導の実践研究

—「歌うこと」についての調査からみた問題解決への考察—

赤川 優子

A Practical Study of Singing Instruction at a Training School for Nursery School Teachers — A Study on Problem Solving from the Viewpoint of Research on Singing —

Akagawa Yuko

The purpose of this study was to investigate students' attitudes toward singing in the Music IV class at Iwakuni Junior College, a nursery school for childcare professionals, and to discuss how to solve the problem. The results of the survey revealed that the students had problems and difficulties with singing. While singing instruction in a single class was effective to a certain extent, the need for individualized instruction was also evident. This study was the first step in a research effort to improve specific instruction.

キーワード；声楽、音楽表現、音楽教育

Key words ; Vocal music, Musical expression, Music education

1. はじめに

子どもにとって「歌うこと」は感受・共感といった心の発達、呼吸運動に伴う身体の発達に大きな役割を果たすとされ、保育において重要な活動である。音楽教育の中でも「歌うこと」を重視した、ハンガリーの民族音楽研究者、作曲家、音楽教育家のコダーイ (Kodály Zoltán 1882-1967)^{注1)}は次のように述べている。「子どもたちの声とセンスは非常に素晴らしい。よい指導を受けることさえできれば、どんなに難しくても、子どもたちの精神的・肉体的発達の度合いに適した曲を、高い芸術的完成度を持ってうたうことができる」¹⁾

このことは保育者に求められる音楽の資質・能力の重要性を説くものであり、AI技術が進歩する現代社会において、そのニーズは高まる一方である。まず、保育者は歌唱活動の意義と目的を十分に理解したうえで、子どもの歌唱活動を効果的に発展させるための技術を身につける必要がある。そのためには、基本的な歌唱技術習得の他、子どもの歌唱活動を支援するためのピアノ伴奏や弾き歌いを軸とした総合的な音楽技術の習得が必須とされる。また、音楽活動の場面で子どもたちに「歌

いたい」と導かせるためには、保育者自身が心から楽しんで歌い、彼らの憧れとなるような魅力的な歌手であることが望ましいと考える。

しかしながら、客観的に「美しい歌声」「魅力的な歌声」と感じられるような歌唱技術を身につけることは簡単なことではない。「歌うこと」は心と身体のしなやかな筋肉運動であり、私たちが生まれ持った楽器である自分の「声」「身体」と向き合うことでもある。それを磨くためには時間をかけて練習を継続するだけでなく、さまざまな音楽活動や芸術活動を通じて自分の感性を豊かに育てることが大切であると考えます。

以上を踏まえたうえで、保育者養成校における学生の歌唱指導向上に向けた授業内容と指導の在り方を考察したい。

2. 研究の目的

「保育士・教員養成課程に入学してくる学生のほとんどは音楽経験が少ないのが実状であり、卒業までに音楽実技の能力を指導者にふさわしいレベルまでに引き上げるための授業の在り方は常に大きな課題となっている。」²⁾ このことは、多くの先行研究で明らかとなっており、本学も例外ではない。限られた期間での音楽技能の習得という点において、多くの保育者養成校でピアノ実技指導が優先されがちだが、前述したように音楽活動の柱である歌唱がおざなりになってはならないと考える。本研究では、学生の歌唱に関する意識調査と分析を行い、学生一人一人の歌唱技術を高めるために有効な授業内容と歌唱指導方法を考察することを目的とした。

3. 現状

3-1 「音楽」の授業内容

本学では二年間の学びの中で、音楽に関する専門教育科目として、「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「音楽Ⅳ」^{注2)}がある。これらの授業は、45分の一斉授業と45分のピアノ実技レッスンから成っている。（「音楽Ⅰ」のみ、30分の一斉授業と60分のピアノ実技レッスン）

まず、一斉部分については、「音楽Ⅰ」では、音楽基礎知識の習得・子どもの歌を60曲以上知る。「音楽Ⅱ」では、コード奏の習得・基本的な歌唱活動の指導力を身につける。「音楽Ⅲ」では、教材研究を通じて実践力を身につける。「音楽Ⅳ」では、歌唱法を学び歌唱指導に活かす・合奏法を学ぶ。以上のカリキュラムの中で、様々な視点から保育者に必要な音楽養成を行っている。「音楽Ⅳ」の授業では歌唱を重点内容としており、声楽を専門研究とする筆者が一斉授業を担当している。

次に、ピアノ実技レッスンについては、複数の講師が担当する学生グループをそれぞれ受け持ち、時間を分配して個別レッスンを行う。二年間を通じて、最低60曲以上の弾き歌いレパートリー習得を目標とし、本学オリジナルの音楽課題リスト^{注3)}に基づいて、個人の技能レベルに対応した実技指導を行っている。

3-2 「音楽Ⅳ」一斉授業の内容

「保育者として必要な歌唱法を学び歌唱指導に活かす」ことを到達目標として全15回の授業を展開している。第1講から第4講、第12講から第14講の7回については、声楽における基本的な発声法を学びながら子どもの歌、ミュージカルソング、シャンソン、ポップスソングなどバラエティに富んだ曲目を設定し歌唱指導を展開する。第5講から第11講については、保育現場での音楽実践を目的とした、クラスでの合奏アンサンブル（歌唱も含む）活動を行い、学校行事であるウィンターコンサート（2学年合同）にて発表する。その後、歌唱の授業に戻り最終15講では歌唱の実技テストの実施し学生評価を行う。

3-3 「音楽Ⅳ」歌唱指導

明るく伸びやかな歌声を身につける為、ベルカント歌唱^{注4)}の発声法を基盤として歌唱指導を行っている。歌うために大切な3つの要素として、「Bless 息・呼吸」「Muscle 筋肉」「Diction 言葉」を課題としている。この中で最も重要視しているのは、「Diction 言葉」である。コダーイは、次のように述べている。「言語教育のように、音楽教育においても、子どもが多数の言語を不確実に教えられれば、その子は結局まともに話せなくなる。音楽的基盤を、一つのシステムの上に強固に築いておかなければ、その子どもは音楽的に混乱するだけなのだ。」³⁾ このことは、歌唱活動が「表現」の領域にとどまらず「言葉」を中心とした他の領域とも密接な関わりがあることを再認識するものであると同時に、歌唱の要素における「Diction 言葉」の重要性を説くものである。保育者は歌唱する際、まずは「言葉」を正しく明瞭に発語することを心がけなければならない。

具体的な指導内容は次の通りである。「Bless 息・呼吸」・・・身体（横隔膜）の広がり（ゆるめる意識）を感じながら、腹式呼吸を行い、息の流れに声をのせて歌うことを心がける。歌唱のウォーミングアップとしてロングブレスとショートブレスのトレーニングを行い、呼吸法を身につける。「Muscle 筋肉」・・・姿勢、表情、目の開き、口の開きなど、歌唱に必要なしなやかな身体の使い方を身につける。「Diction 言葉」・・・言葉（歌詞）をはっきりと発語することを声かけし、子音・母音を明瞭に発音する。促音、撥音、濁音、引き音、拗音等について正しく発音する。

学生は、ピアノ伴奏に合わせて子どもの歌を中心とした様々な曲を歌唱し、レッスン形式で筆者が気づきや改善ポイントを指導する。また、授業の振り返りとしてシラバスの学習記録に自己の歌唱への取り組みと達成度を記録している。

3-4 「音楽Ⅳ」の一斉授業における問題点

ピアノの実技については各担当教員による個別レッスンがあるのに対し、歌唱については一斉授業の為、学生一人一人の声を聴いて個別指導する時間を設定できないのが現状である。このことを問題点とし、学生の歌唱についての意識調査から一斉授業での効率的な歌唱指導を考察する。

4. 研究方法

4-1 対象

音楽Ⅳを受講する2年生51名（男性2名、女性49名）を対象とした。

4-2 調査期間

令和4年11月、授業第3講にて第1回目（①～⑩）、令和5年1月、授業第15講にて第2回目（⑩）を実施した。

4-3 調査方法

学生の「歌うこと」への意識と困り感についてのアンケートを実施し分析する。アンケートの質問項目は次の通りである。なお、⑩については、15回の授業の序盤と終わりとで2回アンケートを実施し、「歌うこと」の意識の変化を調査した。

- ①歌うことが好きである。
- ②歌うことが得意である。
- ③音程を捉えて歌うことが難しい。または苦手である。
- ④拍子やリズムによって歌うことが難しい。または苦手である。
- ⑤弾き歌いでの歌唱が難しい。または苦手である。
- ⑥人前で歌うことに抵抗がある。
- ⑦保育実習、幼稚園実習中の音楽活動（ピアノ・歌唱・弾き歌い・手遊び歌）を振り返り、気づき（良かった点、反省点など）を自由に述べよ。
- ⑧「歌うこと」を通じて、あなたが子どもに伝えたいことを自由に述べよ。
- ⑨音楽Ⅳの一斉授業についての感想や希望を自由に述べよ。
- ⑩音楽Ⅳの一斉授業（歌唱法）を受講する中で歌唱の際意識している項目を選択せよ。（複数回答可）

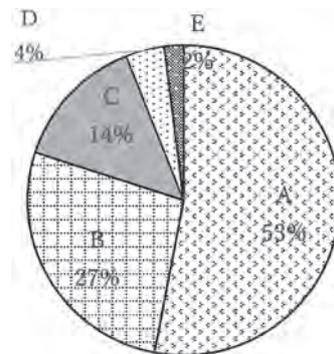
4-4 倫理的配慮

アンケートを実施する際、授業改善の為の研究を目的とする旨を口頭で伝えた上、アンケート用紙には、「アンケートは研究データとしてのみ用いること」、「個人が特定される情報の公開は一切しないこと」、「個人の評価や成績とは一切関係しないこと」を記載した。

5. 研究の結果と分析

①歌うことが好きである。

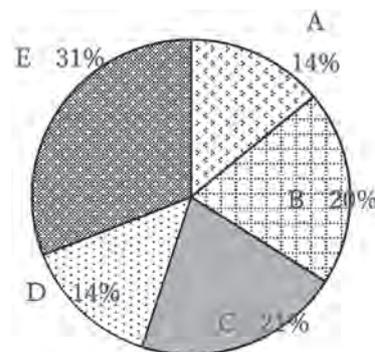
A 当てはまる	27名
B やや当てはまる	14名
C どちらとも言えない	7名
D やや当てはまらない	2名
E 当てはまらない	1名



全体的に歌うことは好きだという傾向が見られる。自由記述では、「好きな歌を歌うと楽しい気持ちになれるから。」「みんなで声を合わせて歌うのが好きだから。」という意見の一方で、「聴くのは好きだが、歌うのはあまり好きではない。」といった意見もあった。

②歌うことが得意である。

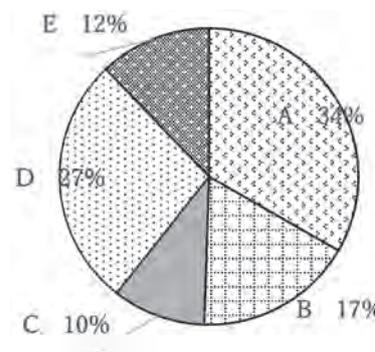
A 当てはまる	7名
B やや当てはまる	10名
C どちらとも言えない	11名
D やや当てはまらない	7名
E 当てはまらない	16名



「好き」と「得意」の意識の差は明確である。得意ではないと感じている学生は約半数を占めている。「好きだが自信がない」「音程が外れるから」という意見が多く見られた。一方で得意な理由としては「周りから上手と言われるから」「中学校、高校の授業で誉められたから。」など、他者からの評価の影響が大きいことが分かる。

③音程をとって歌うことが難しい、または苦手である。

A 当てはまる	17名
B やや当てはまる	9名
C どちらとも言えない	5名
D やや当てはまらない	14名
E 当てはまらない	6名

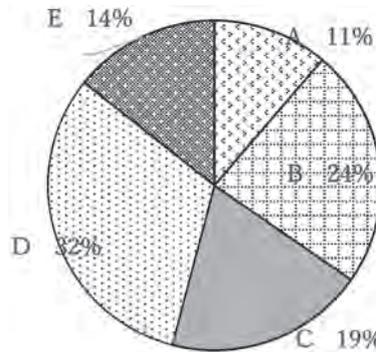


約半数の学生が音程を捉えて歌うことを難しいと感じていることが分かる。「高い音や低い音が難しく感じる。」「音程に跳躍があるとき」「音程が合っているのか、自分では分からない。」という回答があった。

④拍子やリズムによって歌うことが難しい。または苦手である。

A 当てはまる	6名
B やや当てはまる	12名
C どちらとも言えない	10名
D やや当てはまらない	16名
E 当てはまらない	7名

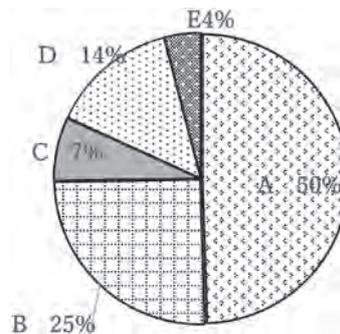
苦手とする学生には、「拍子やリズムにのれているのかが分からない。」「速度やリズムの変化についていけないことがある。」「楽譜を読み取ってリズムに表すことが難しい。」「特定のリズムが苦手」という回答があった。



⑤弾き歌いでの歌唱が難しい。または苦手である。

A 当てはまる	25名
B やや当てはまる	13名
C どちらとも言えない	4名
D やや当てはまらない	7名
E 当てはまらない	2名

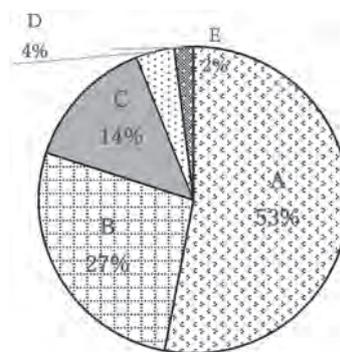
約8割の学生が弾き歌いを難しいと感じていることが分かる。「歌だけなら歌えても、ピアノと同時だと集中が二分化され上手く歌えない。」「弾くことに必死で、歌のことにまで意識がいかない。」「弾き歌いになると、途端に声が出なくなる。」「ピアノを間違えると焦ってしまい、歌もつられて歌えなくなる。」また、②で歌うことが得意と答えた学生が、弾き歌いになると苦手に転じている回答もあった。



⑥人前で歌うことに抵抗がある。

A 当てはまる	21名
B やや当てはまる	11名
C どちらとも言えない	9名
D やや当てはまらない	6名
E 当てはまらない	4名

8割の学生が、人前で歌うことに抵抗感をもっていることが分かる。自由記述からは、「自信がないので恥ずかしい。」「下手だと思われたくない。」「人前だと、声が出ないような気がする。」「緊張すると音程が分からなくなる。」という回答が多くあった。一方で、「もともと苦手だったが、授業などで歌う機会が増えて嫌いではなくなった。」という回答もあり、苦手意識を克服している学生もみられた。



⑦保育実習、幼稚園実習中の音楽活動（ピアノ・歌唱・弾き歌い・手遊び歌）を振り返り、気づき（良かった点、反省点など）を自由に述べよ。

「止まらずにピアノを弾くことが重要だと実感した。（8名）」「子どもたちの前だと、様子を見ながら弾き歌いしなければならないため、そちらに気を取られて上手く出来なかった。（6名）」「ピアノを自信をもって弾くことができた。（4名）」「曲に合ったテンポで弾くことが出来なかった。（2名）」「手遊びは自分が楽しんでいますと、子どもたちも楽しんでいたように感じた。」「先生方は、ピアノを弾きながらはっきりと大きな声で歌っていて、子どもたちの良いお手本となっていた。」「弾き歌いの時に声が出せなかった・声が小さかった。（3名）」このように、ピアノ演奏についての感想や反省の回答が多く見られ、歌唱についての感想はごくわずかであった。

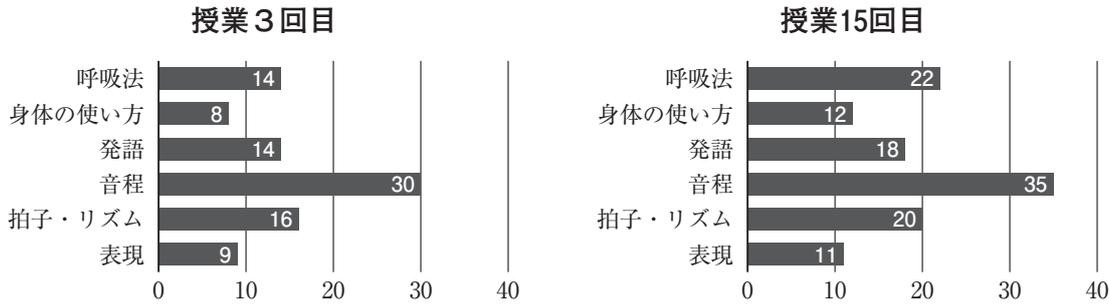
⑧歌うことを通じてあなたが子どもに伝えたいことを自由に述べよ。

「歌うことの楽しさ（35名）」「みんなで歌うことの楽しさ・一体感（6名）」「歌の上手い下手を気にせず歌うこと。（4名）」「表現することの楽しさ（2名）」「表現力（4名）」「自信をもって歌うことを身につける。（2名）」「想像力」「言語力」「リズム感」「身体を使って歌うこと。」「沢山の歌にふれて、音楽の素晴らしさや、楽しさを伝えたい。」「その歌の背景や物語。」「ピアノの音を聴きとり歌う力」「園生活のなかで歌う季節の歌から、日本の四季の素晴らしさを伝えたい。」ほとんどの学生は子どもたちに歌う楽しさを伝えたいと考えている。ここに子どもに対する保育者としての音楽への理想像と、自身の歌唱に対する意識との間に矛盾が生じていると言える。

⑨音楽Ⅳの一斉授業についての感想や希望を自由に述べよ。

「歌うコツや呼吸法について学べて良かった。（8名）」「子どもの歌以外の、様々な歌や英語の歌を知ったり歌ったりすることが楽しい。（5名）」「弾き歌いの発表は人前で弾くことに慣れる機会になるので、自分の力になると思う。（4名）」「音楽Ⅳの一斉授業は歌うことに集中できるので楽しい。（6名）」「コロナでなかなか歌えなかったので、みんなと一緒に歌えることが楽しい。（2名）」「歌うことの苦手な気持ちを変えたい。」「実技試験に向けた練習をして、現場で通用する力（歌・ピアノ）を身につけたい。」「授業で習った、息に乗せて歌うことができるようになりたい。」「自分の体調によって、声も大きく影響することを実感した。」このように、歌唱法を学んだことによる意識の変化や、自分の歌声についての気づきなど、歌唱に対して前向きに取り組む意識が多くあった。一方で、「知らない曲や、英語の曲は難しくて歌えない。」「ソルフェージュが苦手だ。」「人前で一人で歌うのは抵抗がある（5名）」のように、人前で歌うことに対する苦手意識や実技試験の実施法への要望もあった。

⑩音楽Ⅳの一斉授業(歌唱法)を受講する中で歌唱の際意識している項目を選択せよ。(複数回答可)



授業の中で「歌うこと」への意識に変化が見られた。特に発語と音程の部分については、大きく上回っている。自由記述から、「しっかりと息を吸うように心がけた」「言葉をはっきりと発語するように心がけた」「歌う時の姿勢に気を付けるようになった」「楽譜をみて、正確な音程で歌うよう心がけた」等の回答があった。

6. 考察

分析の結果から、「歌うこと」への意識には個人差があることが明確となった。また、アンケート⑩に見られるように、指導者が歌唱についての重要なポイントを毎回の授業のなかで振り返り、再々にわたり伝え実践することで、学生の歌唱への意識に変化が生じていることが分かった。しかしながら、「音程」「リズム」など歌唱に対する自己意識や自己評価と、実際の歌唱技術が一致しているとは言い難い。実際に、歌唱技術への自己評価が低い学生が、豊かな歌唱力を持っている場合もある。効率的に技術を向上するためには、自分の「できている」「優れている」部分と、「課題が残る」「克服したい」部分を、自己認識し歌唱に対する意識との合致を目指したい。このことから、現在の一斉授業における利点と問題点を考察する。

まず、一斉授業の利点については、他者と一緒に歌い、他者の歌声を聴くという「コミュニケーションとしての音楽」の効果が考えられる。一緒に歌うことを歌唱の楽しさと感じている学生にとっては、集団での歌唱は安心感や癒しをもたらしめている。人前で歌うことの抵抗感が強い学生にとっては、自分以外の相手がいることによって、歌唱への緊張感も和らいでいると言える。また、音程やリズムなど自信がない場合や、それらを上手く捉えられなかった場合も、他者の歌声に混じることでネガティブな感情に偏らず楽しい気持ちで歌うことができる。

さらに、「コミュニケーションとしての音楽」から得られるこれらの利点は、大人の歌唱活動だけではなく、保育現場での歌唱活動においても同じ事が言える。つまり、学生たちは自らの体験を通じて、子どもたちの歌唱活動の指導や支援に役立てることが可能である。また同時に、「歌うことの楽しさ」を伝えることや、子どもの「歌うこと」への内面に寄り添うことにも繋がると考えられる。

一方で、歌唱における苦手部分の克服、向上という点においては、やはり個別での指導が理想的である。先行研究において平本は次のように述べている。「当然のことながら、学生それぞれの歌唱能力には差があり、多人数での集団授業では一人ひとり歌唱能力を把握することは不可能である。

(中略) 自分の力を正しく認識するためには、指導者から一人ひとりの実技能力の状態を把握したうえで、的確なアドバイスを受けることが必須である。音楽実技は、たとえ同じ言葉で指導したとしても、効果は一様ではない。なぜなら、音楽表現はさまざまな音楽的な知識と音の認知能力、音楽を感受し解釈する感性、身体そのものの操作能力といった個人差の大きい要素が複合して生み出されるものだからである。声楽においていえば、その学生が持っている自分では気づかない声の美しい響きや音楽的な感性から生まれる豊かな表現力などは、指導者がそれに気づいて言葉によって褒めることで初めて認識できることもある。」⁴⁾ このように、指導者が個別で学生の声を聴きとり、その声の特性を理解した上で、適切かつ丁寧に指導することが必要であると言える。

7. 今後の課題と研究

本研究では、歌唱アンケート調査を通じて、学生の「歌うこと」への意識を分析し、一斉授業における問題点を明らかにした。学生一人ひとりから、歌唱に関する様々な意見や本音などを聞き取れたことは、大きな収穫となった。また、継続した歌唱指導によって、学生の意識の変化を読み取れたことは、授業における歌唱指導の一定の成果と言えよう。

今後は本研究を踏まえたうえで、音楽Ⅳにおける一斉授業の内容及び展開を検討するとともに、「音楽Ⅰ」～「音楽Ⅳ」の全体での歌唱指導の骨組みについても見直す必要があると考える。具体的な改善策(案)として、入学時の早い段階で、学生一人ひとりの歌声を聞き取り、指導者が声の特性を把握し、学生と指導者の双方が共通認識の上で、個の歌唱能力向上にむけて計画的に取り組めるシステムや、学生が自分の声をフィードバックできるようにポートフォリオを活用する方法など、一斉授業のなかでの利点を活かしながら個々の歌唱能力を向上できる方法を模索していきたい。

さらに、調査の継続として子どもの歌やソルフェージュの歌唱から、「拍子」「音程」「リズム」等における、歌唱力の調査から具体的なデータを集め、学生一人ひとりの歌唱力向上、及び授業改善に向けた研究を続けていきたい。

注

- 1) ゴルターン・コダーイ (Kodály Zoltán 1882-1967) は、ハンガリーの作曲家、民族音楽学者。彼は作曲家バルトークと共に、ハンガリーの民族的な旋律の収集を行い、民謡集などを残した。コダーイは、ハンガリーの子どもの音楽教育にも大きな影響を及ぼした。とりわけ歌唱活動を中心に、ソルミゼーションやハンドサインを導入し、音楽的な基礎力の育成に努めた。
- 2) 岩国短期大学幼児教育科、「令和4年度シラバス・学習記録」、岩国短期大学、2022 参照
- 3) 岩国短期大学、井上美佳氏によって考案、作成されたものである。
- 4) ベルカント Bel Canto (美しい歌) 呼ばれる歌唱技術は、マイクロフォンがない時代において、大きな劇場などで歌う際、隅々まで響く発声法として18世紀にイタリアで確立したとされる。オペラ歌手など、マイクを使わない歌手がこの歌唱法を学び、声の美しさにとどまらず、声量の増

加や声の伝達力が増すことにも効果をもたらした。声楽の基本として、現在まで受け継がれている。

引用文献

- 1) 石井玲子、「実践しながら学ぶ子どもの音楽表現」、保育出版、2018、p.75
- 2) 平本弘子、「保育士・教員養成課程における学生の声楽技能習得に関する考察－学生の意識調査から－」、福山市立大学教育学部研究紀要、2018、p.77
- 3) 前掲書1)、p.75
- 4) 前掲書2)、pp.87-88

参考文献

- フレデリック・フースラー、イヴォンヌ・マーリング、「うたうこと 発声器官の肉体的特質－歌声のひみつを解くかぎ－」須永義雄、大熊文子共訳、音楽の友社、1978
- 松尾篤興、「美声学」河合楽器製作所、2008
- 石井玲子「表現者を育てるための保育内容「音楽表現」－音遊びから音楽表現へ－」、保育出版、2021
- 三森桂子、小畑エマ、谷田貝公昭監修、「実践 保育内容シリーズ5 音楽表現」、一藝社、2018
- 内田陽一郎、「感情表出のための歌唱技法の実際－G. サイドラー《歌唱技法》を中心に－」、エリザベト音楽大学紀要、1992
- 川井弘子、「うまく歌えるからだのつかいかたソマティクスから導いた新声楽教本」、誠信書房、2015
- 昭和音楽大学歌曲研究所、大賀寛（監修）、「解説付日本歌曲選集1」、全音楽譜出版社、2005
- 萩野仁志・後野仁彦、「「医師」と「声楽家」が解き明かす発声のメカニズム」、音楽の友社、2012
- 神原雅之・鈴木恵津子、「改訂 幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育」教育芸術社、2020
- 井上美佳、「保育者養成校における音楽科カリキュラムについての一考察Ⅰ～Knowing to Playの考え方に基づくピアノ指導での事例として～」、岩国短期大学紀要、2017
- 井上美佳、「保育者養成校における音楽科カリキュラムについての一考察Ⅱ－大学教育における「主体的・対話的で深い学び」とは－」～、岩国短期大学紀要、2018

謝辞

本論文執筆にあたり、本研究の調査にご協力くださいました本学の学生、及びご指導を賜りました先生方に深く感謝申し上げます。

保育者養成校における壁面製作指導の一考察

— 造形表現の授業実践研究 —

向山 伊津子

A Study of Teaching Wall Displays at a Childcare Training Schools

— A Study of the Practice of Teaching Modeling Expression —

Mukoyama Itsuko

The purpose of this paper is to discuss basic research on art education at a childcare training school. I have been given the opportunity to teach plastic arts at a childcare training school since this year, and I have been trying to find ways to develop my own various methods of art education into early childhood education through trial and error. In the process, I feel that "Wall Displays" has potential as an art form, and I am working with students to create artwork on a daily basis. In this study, we would like to discuss the possibilities of "Wall Displays" and our approach to formative expression as a childcare training school, including the improvements we have made in our classes this year.

キーワード：壁面製作、造形表現、保育者養成校

Key words ; Wall Displays、Modeling Expression、Childcare Training Schools

I はじめに

本年度から保育者養成校にて造形表現を教授する機会をいただき、自分自身のこれまでの美術教育の様々なメソッドを幼児教育にどのように展開していくか毎日試行錯誤をしている。その中で、「壁面製作」に関してはアート作品としての可能性も感じ、学生と日々作品作りに取り組んでいる。本研究では、今年度取り組んだ授業改善を含め、「壁面製作」の可能性と保育者養成校としての造形表現の取り組みについて論じたい。

本学では、保育者として協同しながら作業に取り組む行事がカリキュラムとして組まれている。造形表現が貢献しうる可能性を感じながらも、幼児が創造的に生きていくために必要な資質・能力をどのように育むのかについて、授業での各活動を通じて学生に教授する必要性も感じている。そこで、初年度の本研究では、幼児教育における造形表現の保育者養成校での貢献度や今後の指導内容についても考察を行う。保育の現場の子供たちだけでなく、学生においてもデジタル化時代で育つ子どもたちである。だからこそ、画一的な表現指導ではなく、子供たちの感性に響くような共創する表現の体験を実現したい。

II 目的・先行研究

保育内容演習「表現 I B」で行った「壁面製作」をもとに、「壁面製作」の際に教授する内容とデザイン性、作品を通じて学校・現場・地域への貢献度を考察する。先行研究としては、「壁面製作」についての方法や歴史を論じたものや、保育者養成校における授業実践報告がある。また、保育者への調査を行い、保育現場での壁面装飾の意義を問うたものもある。しかし、本論文では、保育者養成校における「壁面製作」の可能性としての地域交流実践など、造形表現に期待された展開についての取り組みについて論じるため、同じ先行研究は少ない。よって、本研究意義はあると考える。

III 方法

本学保育内容演習「表現 I B」において、2 学年約50名に「壁面製作」と題して5回の授業で展開し、制作活動を行った。

本授業において、筆者が行った指導内容及び方法は、構成の下書き段階で空間デザインに関する指導を行う。次に、製作段階では、使用する素材やイラストについての技術指導を行う。最終段階では、着色や配置、耐久性や空間装飾、造形美についてのアドバイスをを行う。この授業展開で得た学生の感覚や変容をまとめ、次年度の授業改善へと繋げたい。

IV 研究内容・考察

1. 壁面製作時にあがった使用イラストに関する概念について

壁面制作は、幼稚園・保育園・施設などで部屋を明るく彩る環境として作成されている。実際に園を訪問して感じたことは、「保育らしい」「可愛らしい」イラストが似ているということだ。同じようなイラストは、どのように選択されたのかという疑問を抱き、実際に S 幼稚園に出向き、「壁面製作」の過程を観察させていただいた。

S 幼稚園の保育者は、壁面構成の目的（季節や行事）に沿って、複数名で原案を練る。その際には、保育雑誌などからアイデアを得る。さらに、毎月発刊されている「PriPri」（世界文化社）や「Piccoro」（Gakken）などを保育者同士で見ながらアイデアを練っている。保育者たちは気が付いていないようだが、どの保育雑誌にも似たようなイラストばかりが掲載されている。アイデアと言いながらも、型紙なども付録としてついていて、簡単に雑誌通りの「可愛らしい」動物のイラストが出来上がった。はさみで切る作業などは手慣れたものではあったが、ベテラン保育士はフリーハンドでどんどん同じ形を切っていく。まだ新人の保育士は型紙にそって下書きし、切り出していった。保育雑誌通りの色画用紙や素材がない場合も、似たような素材や園にあるものを工夫して使うという。雑誌によってはコピーの倍率まで載っていて、簡単に拡大縮小ができるという。目にも鮮やかで可愛らしい製作物が出来上がった。これを壁面にデザインしていくのである。観察した現場では、立体的な構造になっていなかった。これは、子供たちの手に届く高さであるため、安全に考慮していると聞いた。しかし、手の届かないところや空間として利用できる建築構造では吊り下げるなど立体的な装飾も可能である。平面に制作することに慣れていない様子が見えた。

観察してわかったことは、少ない時間の中で、効率的に壁面製作を行っていくということである。一つ一つを創造的にデザインしていきたい気持ちはあるが、そのアイデアを練る時間も惜しいといった声さえ聞いた。その結果、アイデアだけでなく、イラスト等もすべてを保育雑誌等から「模倣」しているという現状がある。保育者が優しく楽しい雰囲気のために作り上げたそれらのイラストが、反面、デフォルメされた動物表現など固定観念を植え付けてしまう。保育者は季節感などを感じるようにとねらいを持って製作するが、実際には、子供の感性で空の色の違いや季節の匂い、風の強さなどを感じてほしい。むしろ、季節ごとにデフォルメされたイラストによって、子供たちの感性を鈍感にしてしまうのではないだろうか。

そこで、保育者養成校に通う学生に、保育雑誌等のコピーを禁止し、オリジナルのイラストを使用した壁面製作に取り組むことを示唆した。

2. 「壁面製作」における教授内容

壁面製作に入る前に壁面制作で使用する技法を学ぶ。以下に技法を挙げる。

- (1) マーブリング
- (2) スパッタリング
- (3) 吹き流し
- (4) デカルコマニー
- (5) ちぎり絵
- (6) 切り絵
- (7) コラージュ

学生たちは、一つ一つの技法を楽しみながら体験し、それぞれの形を擬態語で表したり、別の形へと空想する姿が見られた。指導段階で大切にすることは、ただ技法を学ぶだけでなく、その技法から生み出された作品を目で楽しんだり、相手に見せたり、共感する時間を持つように設定した。保育現場でも、子供同士の表現は、相手の表現を受け入れるという過程も大切にしなければならない。自分とは違う表現をした他者を認め、お互いが称賛するという経験は幼児期にも必要だと考える。学生自身がこの体験を重ね、保育者としての表現を受け入れる素地を育ててほしいのである。

次に構成の下書き段階で空間デザインに関する指導を行う。

下書きを考える際には、インターネットや本からのアイデアは入れず、会話をしながらアイデアスケッチをする方法を取った。テーマを選ぶことから始めるのだが、その時点から会話が弾み、自分のイメージを言葉で伝えたり、他者のスケッチに自分が書き加えたりする様子が見られた。イラストは、人物でも動物でもすべてオリジナルで描かせたが、どうしても保育雑誌に掲載されているようなイラストを好む傾向がある。そのため「世界で一つの物をつくろう」という言葉がけをし、独自性を大切にしたい指導を試みた。創作というものは、一つとして同じものでなくていい。しかし、相手に受け入れられたいために画一的なものに落ち着きたいと思うのも理解できる。芸術の根幹である「創造性」は真似ではなく、独自性を優位に考えるのであって、決して画一的な量産できる容

易な物を歓迎していないのである。そこで、空間デザインの日線で、「枠からはみ出してもいいよ」「もっとダイナミックに配置してみたら？」など、各グループにアドバイスを行った。最初は戸惑う学生もいたが、実際に装飾する場所に出向き、空間を見ながら配置を考えたり、様々なパターンを提案しあう姿が出るようになった。この時に学生の「創造性」が一段階上がったように感じられたのである。

続いて、製作段階では、使用する素材やイラストについての技術指導を行った。使用する材料については、廃材や余っている物を再利用することを提案した。これは保育現場でも実際に取り組んでいたことを参考にしてアドバイスした内容である。学生は安易に店に買いに行くことを考えるが、まずは身の回りの物を利用することを考えることは、創造性にも繋がる。これも同じ素材が大量にないことで、作品のオリジナリティーに繋がる可能性が高まるのである。この楽しさ・冒険心にも似た感覚を、保育者自身が子供たちと一緒に感じてほしいのである。

イラストについては、絵画指導においても取り組んだ、構図の配置や配色などについてアドバイスを行った。この作業においても、基礎的な絵画指導の必要性を感じた。立体的な装飾をする際にも、基礎的なデッサン力は必要であるため、図画工作などの時間に学生に経験させておくことは必要だと再認識したのである。

最終段階では、着色や配置、耐久性や空間装飾、造形美についてのアドバイスを行った。平面的な構図ではなく、飛び出してくる感じや角度によって見え方が変わる意外性に言及した。子供たちがもっと見たくするような壁面はどのようなものか、再度この時点で学生に問い直したのである。学生は「きれい」「可愛い」といった意見を出すかと予想していたのだが、「奇想天外な」や「面白い」「ダイナミック」など、当初は出なかった他とは違う独自性に関連する意見が出始めた。「ワクワクする」や「大きい」など、それぞれの学生からそれまでの製作過程で得られた自身の独創性を見せつつ、協同することも意識した言動に成長を感じられた。それらの意見を聞きながら、各グループでの制作・配置についてアドバイスを行った。ここでは、特に素材独自の耐久性や保育現場で求められる安全性にも考慮し、最終段階の作業を行った。この授業展開で得た学生の感覚や変容をまとめ、次年度の授業改善へと繋げたい。

3. 壁面製作の可能性

西村（2017）は、壁面製作の提案として実践報告をしている。「多様な表現に欠けた壁面製作に対して問題意識を持ち、豊かな感性を育み、子どもたちと共に製作できる壁面製作を提案することを試みた。」¹⁾ 西村によると、製作プロセスや学生の感想と作品から考察した結果として、1) 形・色彩で多様な個性を無限に表現できる、2) 偶発性により想像力を働かせる、3) 即興性により連続的活動になる、4) 作品の巧拙を問わない、の4つの特徴があげられている。西村の実践は、授業で製作したのち、作品をキャンパス内のギャラリースペースに展示し、他学年や来校者に壁面製作した作品を見ていただく機会を設定していた。このことは、本学でも実践できると考え、壁面製作ではないが、季節の製作「クリスマスツリー」において、学内、地域に展示を行った。

学生の意欲を高めるだけでなく、作品として完成させる過程を経て、「クオリティー」や「独自性」についてアートの観点から経験できたと感じている。



図 1



図 2



図 3

季節の製作「クリスマスツリー」

V 今後の課題と展望



図 4 岩国徴古館 展示

学生の共同による創造的な活動の体験が、デジタル社会で育つ子供たちだけでなく、この世代に生きる学生にも必要であると感じる。それは、本学の学びの基本でもあるが、ネット社会であっても実際に他者とかがわる保育者という仕事柄、多様な協働をしながら創造的に生きていくことが求められるからである。

デジタル環境を否定するわけではなく、子どもたちや学生の反応を自由にし、新たに必要なバランスを得るためにダイナミックな発想力を養っていきたい。

保育の現場で飾られる壁面装飾は、保育空間であり遊びの空間でもある。この空間にある作品は子供たちの目に触れ、その影響力は大きいと想像できる。多くの仕事を抱える保育者としては、簡単で手に入りやすい素材で見た目の良い壁面製作に頼る傾向があることもわかった。それは保育者は色・形などといった要素がもたらす効果を知りながらそれを実際の

壁面製作に組み込むだけの時間的余裕がないという現実、今後の保育者養成校での造形表現教育の課題として受け止めたいと思う。子供にわかりやすく季節感なども伝わりやすいという製作物は、イラストの可愛さだけではなく、ほかの要素からでも作り出すことができるのではないか。例えば、壁面製作を子どもたちと一緒に行うとするならば、そこに教育効果を望むことも期待できる。

また、西村 (2015)²⁾ は、巨大迷路の実践も紹介していた。本学でも6月に「お店屋さんごっこ」、11月に「キッズランド」、3月に「親子フェスタ」と3回にわたって地域にオープンにされた行事が組み込まれている。ここで、段ボールアートや大型製作物で子供たちの遊び場を提供することが

できる。共同製作で決められたスペースの空間にそれぞれのテーマの世界観を表現することは、壁面製作と同じような過程でより立体的な製作活動として期待できる。今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 西村愛子、壁面制作についての一提案－造形表現の授業実践報告－、駒沢女子短期大学、2017、p.79
- 2) 西村愛子、幼児教育における造形表現の指導実践に関する研究－共創する表現－、駒沢女子短期大学、2015

参考文献

- 幡野由理・山根直人・小田倉泉、保育環境における壁面装飾の意義Ⅰ－幼稚園教員・保育士への質問紙調査から－、埼玉大学紀要教育学部58（2）、2009
- 豊泉尚美、幼児教育におけるデザイン活動としての「壁面構成」－幼稚園・保育園の壁面構成製作活動を中心として－、デザイン学研究 vol.43 No.5、1997

研究ノート

保育学生の生物を取り扱う姿勢の変容 — 学生の虫・小動物に対する意識調査を踏まえて —

水鷄口 陽一

Associations Considered Based on Child Care Students' Preferences for Organisms and Exercise

— Based on a Survey of Students' Attitudes Toward Insects, Small Animals —

Kuinaguchi Youichi

The purpose of this study is to examine teaching methods that can transform the attitude of childcare students toward handling living things, based on a survey of students' attitudes toward insects and small animals. Caregivers believe that by providing an appropriate environmental setting, they can help children develop interest and curiosity and a spirit of inquiry, which is the foundation for the ability to live. However, due to the lack of experience in touching natural soil, students lack interest in familiar plants and animals. Many students do not know how to cultivate and care for flowers and crops and have never touched them, and many students dislike insects and bugs. It is very important for students themselves to take the initiative and have an interest, understanding, and knowledge of the various environments around them. In addition, I would like to change the students' awareness of their dislike of these environments through my classes so that they will be able to take care of children in natural environments in their future careers by cultivating plants and raising living creatures with children without resistance.

キーワード；自然環境, 身近な生物・虫、環境教育

Key words ; Natural Environment, Familiar Organisms and Insects, Environmental Education

1. はじめに

筆者は平成30年に岩国市内55の園へのアンケート（図表1）を平成31年に実施した¹⁾。回答を得られたのは34園で内訳は幼稚園10、保育園16、認定こども園8である。そのアンケートの最後の項目に保育者養成校に対しての要望や意見をいただいた。その代表的な回答の中に、「虫を嫌がらず触ったり親しみを持って関われる活動を体験させてほしい。」「子どもたちと虫を追いかけたり、捕まえたりできる先生がいいと思う。自然のものを使って作ったり遊んだりできる先生を養成してほ

しい。」「動植物の取り方や基本的な手入れの仕方を学ばせてほしい。」「保育者自身が新しいことに挑戦したり、色々なことに興味関心を持つようにしてほしい。」「土肥に触れ自然を使っての遊びを楽しむことを自らが体験してほしい。知識だけでなく体験して得れた知恵を使えるようにしてほしい。」などの記述があった。これらを見ると、実際に就職した卒業生は現在の保育現場では、自然環境に積極的に関わることが出来ていないと推察できる。筆者は現在担当する保育内容演習「環境Ⅰ」、保育内容指導法「環境Ⅱ」の授業に於いて、それぞれ学生への「虫・小動物に関するアンケート」を実施し学生の意識調査を実施した。本論はその分析に於いて関連する項目を抽出し照らし合わせることにより、本学学生の自然環境に自らが親しむことができるようになるための授業改善を行い、その結果学生の意識の変容があるのかを考察する。

●植物に関する内容	
Q1, 貴園では季節ごとに花の栽培を行っていますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
Q2, Q1「はい」の園 その花の種類を教えてください。(複数あればご記入を)	
Q3, Q1「はい」の園 栽培には園児たちも一緒に活動していますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
Q4, Q3「はい」の園 園児の栽培活動の範囲をお知らせください。(当てはまる全てにチェックして下さい)	
<input type="checkbox"/> 土作り <input type="checkbox"/> 種植え <input type="checkbox"/> プランターや花壇への植え替え <input type="checkbox"/> 定期的な水やり <input type="checkbox"/> 花摘み <input type="checkbox"/> 定期的な雑草とり <input type="checkbox"/> 種の採取・保存 <input type="checkbox"/> その他	
Q5, 花の栽培で園の授業に生かしていることはありますか。(例:花を観察し絵を描いている等)	
Q6, 貴園では季節ごとに作物の栽培を行っていますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
Q7, Q6「はい」の園 その作物の種類を教えてください。(複数あればご記入を)	
Q8, Q6「はい」の園 栽培には園児たちも一緒に活動していますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
Q9, Q6「はい」の園 園児の栽培活動の範囲をお知らせください。(当てはまる全てにチェックして下さい)	
<input type="checkbox"/> 土作り <input type="checkbox"/> 種や苗植え <input type="checkbox"/> プランターや畑等への植え替え <input type="checkbox"/> 定期的な水やり <input type="checkbox"/> 追肥作業 <input type="checkbox"/> 定期的な雑草とり <input type="checkbox"/> 種の採取・保存 <input type="checkbox"/> 収穫 <input type="checkbox"/> 作物の料理 <input type="checkbox"/> その他	
Q10, 作物の栽培で園の授業に生かしていることはありますか。(例:作物の絵本の読み聞かせ等)	
Q11, Q1またはQ6で「はい」の園 植物や作物の栽培を通じて、貴園のねらいはどのようなものですか。	
●動物に関する内容	
Q12, 貴園では動物(昆虫含)の飼育を行っていますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
Q13, Q12「はい」の園 その種類を教えてください。(複数あればご記入を)	
Q14, Q12「はい」の園 飼育には園児たちも一緒に活動していますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
Q15, Q14「はい」の園 園児の飼育活動の範囲をお知らせください。(例:メダカの餌やり当番を決めている。定期的な水の入れ替えを一緒にしている等)	
Q16, 動物の飼育で園の授業に生かしていることはありますか。(例:かぶと虫の成長をスケッチしている等)	
Q17, Q12で「はい」の園 動物の飼育を通じて、貴園のねらいはどのようなものですか。	
Q18, 保育者養成校に対しての要望や意見などあれば、是非ご記入ください。(環境に関わらずどのようなことでも構いません)	

平成30年度、領域「環境」
に関して授業改善を目的に、
アンケートを施す

岩国市内55園に郵送
回答はFAXにて34園解答
を得た
内訳は、
幼稚園10園
保育園16園
認定こども園8園

植物に関して、生物に関し
て、養成校へ要望を明記

図表1 各園に実施したアンケート

2. 研究の目的

領域「環境」のねらいには、「(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」²⁾とあり、いずれにも文頭に「身近な」が含まれている。この「身近」には、子どもが住んでいる家の周辺、登園までの道のり、園内外での周囲の環境のすべてを現し、保育者は適切な環境設定を施すことで、子どもに興味・関心を持たせ、好奇心や探求心を養うことにつなげていくことが、生きる力の土台になると考える。しかしながら、土肥に触れる経験値の少なさからであろうか、身近な動植物への関心がなく、花卉や作物の栽培方法や手入れの仕方を知らず触ったこともない学生や、虫や昆虫嫌いの学生も多く存在する。就職後、前述したねらいを子どもたちに教授するためには、まずは、学生自身が主体性を持ち、この身近なさまざまな環境に興味や関心を持ち理解し知識を持つことはとても大切なことであると考え。また、各園からの要望にもあるように、学生が将来就職した先で子どもたちと植物栽培や生き物の飼育を抵抗感なく行い、子ども達に「身近な」環境を設定し得る保育者になるためにも、授業に於いて学生の苦手意識が変容するような授業改善ができれば、園からの要望に十分応えることができると思える。本研究では、「学生の虫・小動物に対する意識調査」を踏まえて保育学生の生物を取り扱う姿勢が変容するような授業方法を考察することを目的とする。

3. 研究の方法

筆者は学生の植物や生き物に対する知識や捉え方などの実態を把握すべく、毎年学生に対してアンケート（図表2）を実施している。

これらは領域「環境」の授業（保育内容演習「環境Ⅰ」・保育内容指導法「環境Ⅱ」）で実施したアンケートを集計し、学生の生物に対する抵抗感の有無や植物・生物に関する知識を分析し、授業内容を構築する。その授業実施にあたり、学生の様子や感想を観察し、その意識に変容がみられるかどうかを考察した。

対象となる学生は、領域「環境」を受講する65名（男子5名、女子60名）。アンケートは個々の意識の変容を分析するために、記名式で行った。

倫理的配慮

アンケート調査については、学生に事前に研究目的を説明し承諾を得て行った。調査結果についても個人が特定されるような公表はせず、授業改善に活かす趣旨を説明して承諾を得た。

Q1, 花について伺います。スライドに出てくる花の名称と、開花の時期(春夏秋冬)を答えてください。

	花の名称(カタカナ)	開花季節		花の名称(カタカナ)	開花季節
1			6		
2			7		
3			8		
4			9		
5			10		

Q2, 作物について伺います。スライドに出てくる作物の名称と、種まきと収穫の時期(春夏秋冬)を答えてください。

	作物の名称(カタカナ)	種まき	収穫	作物の名称(カタカナ)	種まき	収穫
1				6		
2				7		
3				8		
4				9		
5				10		

Q3, 生き物について伺います。スライドに出てくる生き物の名称と、それを実際家や学校などで飼育した経験があれば○を、また、その生き物は触ることができれば○をいずれも当てはまらなければ×を記入してください。

	生き物の名称(カタカナ)	経験	触れる		生き物の名称(カタカナ)	経験	触れる
1				9			
2				10			
3				11			
4				12			
5				13			
6				14			
7				15			
8				16			

Q4, 虫について伺います。あなたは虫という言葉にどのようなイメージを抱きますか。a番号で答えてください。また、あなたにとって一言で虫を表現するとどんな言葉になりますか。b形容詞で答えてください。
1,好きなイメージ 2,嫌いなイメージ a b

Q5, 次の虫や小動物についてあなたは手で触ることができますか。触れたら○を無理なら×を記入してください。

	虫の種類	○or×		虫の種類	○or×
1	チョウチョ		6	ヤモリ	
2	バッタ類		7	カブトムシ等幼虫	
3	トンボ		8	コオロギ	
4	ミミズ		9	カナブン	
5	ダンゴムシ		10	セミ	

Q6, Q4の答えになった時期ときっかけを教えてください。例:保育園の頃から先生や友達が触っていたので、自分も気にすることなく触れるようになった。小学低学年時担任の先生から恐くないと教えてもらったから。幼稚園の頃友達がミミズを自分の顔にくっつけてきたため、怖くて嫌なイメージになった。小学校の頃毛虫に刺されてから恐くて嫌になった。など。

記名式で回答

Q1, 2, 3はH30市内各園での栽培、飼育に関する調査におけるランキングを示すものである。

Q5の生物を選んだのは、屋外で園芸作業をする際、必ず目にしたり土の中から出てきたりする生き物ばかりを集めている。

図表2 学生に実施したアンケート

4. 集計結果及び分析

(1) 園での飼育状況と学生の実態

Q12の設問の回答から市内34園で飼育していると答えた園は23園(68%)になる。飼育している種類は16種類で1園当たりの飼育数は平均2.7種類の生物を園内で飼育している。図表3には、授

順	名称	正解	経験	触れる	順	名称	正解	経験	触れる
1	メダカ	99%	93%	74%	9	ウサギ	100%	58%	89%
2	カブトムシ	100%	86%	66%	10	アオムシ・イモムシ	84%	40%	12%
3	カメ	100%	62%	63%	11	カタツムリ	99%	23%	31%
4	キンギョ	100%	85%	63%	12	ヤギ	100%	5%	72%
5	スズムシ	60%	19%	12%	13	カワムツ	0%	0%	53%
6	カエル	100%	27%	29%	14	カマキリ	98%	35%	25%
7	ザリガニ	99%	38%	32%	15	エビ	83%	17%	47%
8	クワガタ	98%	73%	58%	16	チャボ	99%	48%	18%

図表3 園での飼育状況結果

業に於いて当該学生65名に対しスライドで園で飼育している生物の映像を映し、その名称と自分や家庭内、また学校で飼育した経験の在り無し、そしてその生物に触れるか否かを答えさせた結果を示したものである。図表中生き物の名前の右に記した割合は学生の正答率、順に経験したことの割合、触れる学生の割合を示す。尚、1～16の順は飼育ランキングを示している。

実際、本学に通学する学生は、広島県呉市から東部においては山口県周南市から通っており、授業に於いて学生には、岩国市内の園へのアンケートではあるが、瀬戸内海に面した岡山、広島、山口県の気候は大きな変動はないため、園での植物や生き物の栽培や飼育する種類は大きな変化はなく、おのずと同種が定まっていると考えたと伝えている。

よって就職した際、園には図表3に示した生物が飼育されている可能性が高く、子どもたちと世話をする際や授業で活動する際には最低でも触ることができないといけない。また、上記生物の寿命や産卵時期・方法、餌やり（種類や回数）を把握しておく必要があると説いている。筆者の授業に於いては、メダカ、カブトムシの生態について前期第8講義と第10講義で詳しく教授している。

トップ10における飼育経験に於いては、メダカ、カブトムシ、カメ、キンギョ、クワガタ、ウサギは何れも半数以上が経験があるという結果になっており、メダカ、カブトムシ、キンギョに至っては8割以上である状況。これは回答を得る際、自分や家庭内、また学校で飼育した経験の在り無しを条件にしており、小学生の頃、兄弟がカブトムシやクワガタを飼育していたのを一緒に観察していたや餌を与えたことがある。または学校の水槽でメダカが飼われていた際、餌を与えた経験者も多く含まれているため、割合が高くなったと推察する。よって主体性を持って飼育した経験者は少ない。触ることが出来るかに関しては、概ねメジャーである生物、見た目の親しみやすさなどから触ることができる結果となっており、ウサギ、メダカ、ヤギが上位を占める。

(2) 屋外で身近にいる生物と学生の実態

順	生物の種類	触れる	順	生物の種類	触れる
1	チョウチョ	52%	6	ヤモリ	31%
2	バッタ	46%	7	カブトムシ等幼虫	20%
3	トンボ	32%	8	コオロギ	18%
4	ミミズ	23%	9	カナブン	23%
5	ダンゴムシ	75%	10	セミ	26%

図表4 生物に触れる割合

図表2 学生アンケートQ5は、屋外で園芸作業する際、必ず目にしたり土の中から出てきたりする生き物ばかりを集めている。その生物に触れるかの割合を示したのが図表4である。

結果は将来園児と一緒に花や作物の栽培ができるのだろうか心配な数字である。土の中からミミズが出てきたとしよう。それを見た保育者が、幼児の前で気持ち悪そうな表情で傍にあった移植ごてですくい上げ、目の届かない場所に移すことが果たしてできるであろうか。お盆過ぎにはセミの死骸などが路上に見かけるようになる。幼児の一人が「せんせい、おはかをつくってあげたいよ」と言ってきた場合、保育者はどうするのであるか。

結果は将来園児と一緒に

図表2のQ4の回答結果が図表5と6になる。調査対象65名の8割以上が虫嫌いという結果となった。その抽象化された虫という単語にはどのような感情を抱いているか。設問では虫に対してのイメージはどうか、好きなイメージか嫌いなイメージかで質問している。

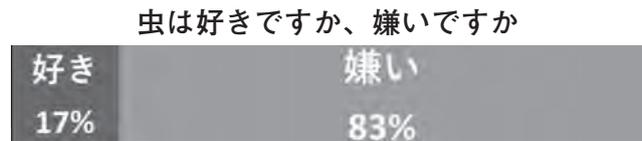
(3) 虫に対する意識調査

図表6では、その記憶として現れた虫のイメージを形容詞で書かせている。回答で最も多かったのは気持ち悪い。次いで怖い、危険となる。このネガティブな言葉3つで77%を占めている。

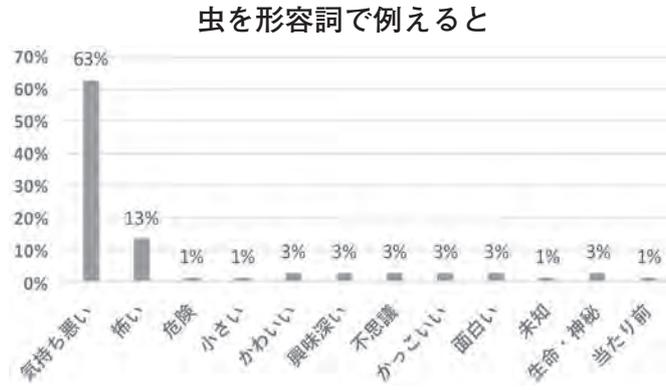
実際にそのような気持ちになった過去のエピソードをQ6で書かせ様々な意見が寄せられた。頁の関係で全ては紹介できないが、「小学生の頃海に行った際もともと足が多すぎて嫌いだったゲジゲジがサンダルに入ってきて気持ち悪くてもっと嫌いになった・保育園の時にてんとう虫に尿をかけられ、触るのがトラウマになった・保育園の頃、男の子はコオロギを捕まえ、女の子はナメクジを飼うブームがあり、女の子にナメクジを手のにせられた事でヌルヌルしたものや虫が苦手になった・小学生の時、男子にカマキリ持って追いかけられた。あと単純に虫の顔が無理・蟻が大好きだったのに手と顔に乗っけて遊んでいたら噛まれて嫌いになった・小さい頃はバッタとか触れていたけど今は体の構造とか汁出したりしてるのが気持ち悪くて無理です。カマキリやミミズ、ナメクジとかによろよろしてるのは子供の頃から受け付けなくて無理で触れないです」など幼い時期に痛い思いや怖い思い、また嫌がらせなど受けその光景がトラウマとして残っているのが分かる。

逆に好意的な意見としては「図鑑を見てかっこいいと思っていたカブトムシやクワガタを父が買って帰ってきてくれた・近所のお兄ちゃん達と遊ぶ事が多く、セミやトンボ、カマキリやバッタを捕まえたり、カブトムシを見せてもらったりしていて、平気だった。特にカブトムシはいまでもかっこいいなあとと思う・小さい頃から外で遊んでたから虫と関わる機会が多かった・子どもの頃にセミやチョウチョが幼虫から成虫に変体すると知り、その様子を見たことから、自分（人間）とは異なる生態を持つ虫に興味深く感じるようになりました・小さい時にカマキリやイモムシを飼育していたことがあり、成長過程を見ていたからです」である。

このような意見からして、自身が幼い頃に体験したことから虫に対しての印象が決まってくる事が殆どであることが分かる。好意的な意見を考察すると、自身の身近な虫に対して好意を持つ大人や年上の兄弟や先輩が、自身を巻き込んで一緒に飼育したり観察したり体験し教えてもらっているケースが多いことが見てとれる。このことからして、逆に虫嫌いな保育者が、対象となる子ども



図表5



図表6

たちに身近にいる虫、総じて自然環境に興味や関心を抱かせ、領域「環境」のねらいを達成させることができるのであろうか。これらのことから冒頭前述した保育者養成校への要望で意見を記した園側の実情がはっきりとし、それを物語っているのではと感じている。

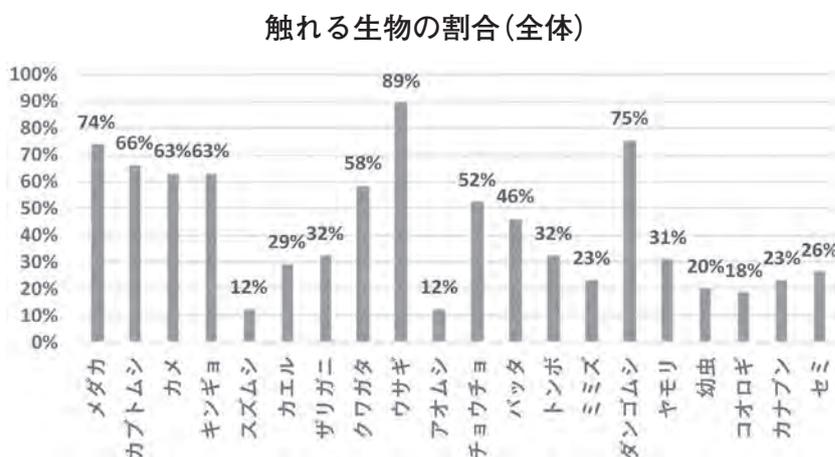
5. 授業改善内容考察

以上、授業で実施したアンケートの結果を元に論じてきた。筆者自身の体験及び園での活動や学生からの見聞から感じ得て授業設定をした。筆者自身に於いて屋外では草むらや雑木林、側溝で生物を目にし、時には触ったり刺されたりした経験がある。しかしながら、それが常態化するにつれ慣習化され屋外生物に対する抵抗感が少なくなったと感じている。また、学生の実習先（N幼稚園）を訪問した際、園庭で園長先生が園児たちとサッカーをしていた光景が浮かぶ。ボールを必死に追いかけて雑木林にでも平気で入り込みボールを取りに向かう園児たちの姿があった。

次に田川（2020）によると、嫌悪感と関連する語の「気持ち悪い」が「慣れる」と共起関係にあるという⁴⁾。これらは「最初はカマキリが気持ち悪いとしか思わなかったけど、見ていくうちに少しは慣れた」「最初は嫌だったが、観察を進めていくうちに慣れて楽しかった」などのように、授業の前半では嫌悪感があったものの、実際に観察する活動をしていくにつれて、虫に対して慣れる様子が伺えたという研究報告である。「これまでの自然体験の不足により虫に対して抱いていた過剰な嫌悪感が、安全が確保された体験を通して緩和された可能性である。最初『気持ち悪い』と感じていた学生が観察を続けることで『慣れ』を実感したという記述が見られる」とある。このように人は、どのような手段・手法であっても自然環境に触れ合う時間が多くなることで、日常的行動が規則正しく反復され自然界の生物に対しての耐性や慣習が身に付くのであろうと考える。

Q3の生物は前述した通り市内の園で飼育されている生物の一覧であり、その生物を番号で示したものである。16種類全てを記すのではなく少数種を省く上位10種類を対象とする。次にQ5であるが、園芸作業中必ず目にしたり触れたりする生物10種である。

これら合わせて20種類の生物を比較対象として、学生の触れる生物の種数や割合を示し考察して



図表9

全学生
触れる種数平均
全20種



図表10

いくこととする。

図表9は図表3、4での内容と重複するが、全学生対象で20種類の生物に於いて触れる割合をグラフで一覧に示したものである。これら20種類は学生が就職した際、高い確率で園児と共に目にしたり触れたりする生物ばかりである。また、これらは一般的に毒性を持ってヒトに被害を与える生物ではない。しかしながらカエルや両生類などには皮膚に抗菌成分を分泌しており、直接触り目を擦ったりする行為はしてはいけないなど、屋外で活動した後は必ずしっかり手洗いを敢行させることも学生には教授している。合わせて、毒性を持ち危険とされる生物として、ハチ・チャドクガ・イラガ・ヒアリ・セアカゴケグモ・マダニ・ムカデ・マムシなど、戸外活動に於いて注意しなくてはならない生物は他多数存在することも同様である。学生が虫を嫌いになった理由として、これら毒性のある生物に噛まれたり刺されたりしたケースもあるため、保育者として十分注意し被害後のケアも含めて把握させておく必要がある。

図表10は、20種中何種類の生物に触れるか種数を示したものである。全学生の平均は8.5種という結果となった。外遊びの経験が多い学生は活発に動き自然植物・生物で遊ぶ楽しさを味わっていることから自然環境に触れる機会が増え、生物への抵抗感が少ないと言える。

外遊びの経験が少ない学生に虫嫌いになった理由を調査してみると、「気づいたら体にくっ付いたり口や目の中に無遠慮に突入してくるところが意味不明すぎて嫌い。人の血を吸う蚊のメスも嫌い。ゴキブリは存在が脅威。クモは私にとって益虫」「小学生の頃海に行ったときもともと足が多すぎて嫌いだったゲジゲジがサンダルに入ってきて気持ち悪くてもっと嫌いになった」「自分の方に飛んできたのがトラウマになっている」と回答があった。

6. まとめと今後の課題

今回の調査で明らかになったのは、外遊びの経験が多い学生は、少ない学生よりも生物に対する抵抗感が少ないということである。

本学の学生の主な就職先として山口県及び広島県内の幼稚園、保育園、認定こども園に就いている。そこで接する子どもたちに保育者は、運動遊びを通じて幼児期に必要な意欲や運動の楽しさを感じさせることを目指さなければならない。なぜならば、幼児期運動指針⁵⁾「幼児が自発的に取り組む様々な遊びを中心に、体を動かすことを通して、生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基盤を培う」とあり、子どもの頃に体を動かす遊びの楽しさを知り運動を肯定的に捉えさせることは、生涯に於いての健康上の効果に結びつくと考えられるからである。

しかしながら、本調査において本学学生の生物に対して抵抗感を感じる学生が多い実情から、各園の要望や領域「環境」のねらいの到達度は低くなると考えられる。

今後「環境Ⅰ、Ⅱ」の授業における改善策としては、①害のある虫、そうでない虫の理解を深めさせる ②実際の虫や昆虫を採取し学内で育ててみる（その生態に理解を深める） ③触れる学生で実際に抵抗なく触る姿を見せ、恐くない雰囲気を出す ④自主的な植物栽培 を授業に組み込んでいく。

最後に本調査の課題として、今後も調査を継続し、さらに前述した授業改善の効果も合わせ報告したいと考えている。

注及び引用参考文献

- 1) 水鷄口陽一「幼児の身近な環境との関わりにおける科学的概念の陶冶について－環境 I における授業内容の保育実践を事例として－」, 岩国短期大学紀要, 第47号, 2018, p.107.
- 2) 2017年文部科学省告示
- 3) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会「幼児期運動指針ガイドブック－毎日、楽しく体を動かすために－」平成24年3月30日, p.50.
- 4) 田川 一希「虫の採集・観察を行う授業は、大学生の虫に対する嫌悪感を緩和するか?」, 宮崎国際大学教育学部紀要, 『教育科学論集』, 第7号, 2020, P.27, p.28.
- 5) 前掲書3), p.6

基礎教養科目の効果の測定・評価に関する研究

— 学習成果のデータ収集・分析を含んだPDCAサイクルによる自己点検・評価 —

朝倉 なぎさ・正長 清志・井上 美佳・下山 希代子

Research on Measurement and Evaluation of the Effectiveness

Basic Liberal Arts Courses

— Self-inspection and evaluation through the PDCA cycle, including data Collection and analysis of learning outcomes —

I はじめに

(1) 本学の教養教育とその位置づけ

本学は、「学則」第2条において、目的及び使命を定めている。その中で、「国家社会の有為な形成者にふさわしい一般教養と、専門的職業に重点を置く高度な知性とを修得」させることを目的として掲げている。また、建学の精神「楽学」の志向する「人格の練成」に基づいて、教育理念には「徳性の陶冶」、「豊かな人間形成を図る」ことを掲げ、それを涵養するものとして教養科目を位置づけている。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）において、本学では基礎教養科目での「教養」について、社会での活動の基礎であり、社会的・職業的に自立するために必要な要素として示している。学習によって習得できる具体的な能力として、「表現力」「コミュニケーション能力」「協働実践力」「マナーの習得」「文化、社会に対する理解」「自然、科学分野についての理解」「異文化理解、異文化コミュニケーション能力」とし、各科目においてそれぞれの能力を養うこととしている。具体的には、基礎科目と教養科目A・B・Cで教育課程を編成し、表現力や協働実践力、地域貢献の精神等を身につける「基礎科目」、社会や文化、マナー等の分野の「教養科目A」、自然、科学分野の「教養科目B」、異文化理解やコミュニケーション能力を身につける「教養科目C」という内容としている。

令和4年度の教育課程における基礎教養科目の構成は、基礎科目として、「基礎ゼミナール」（1単位）、「文章表現法Ⅰ」（1単位）、「文章表現法Ⅱ」（1単位）、「クリエイティブ・ムーブメントⅠ」（1単位）、「クリエイティブ・ムーブメントⅡ」（1単位）、「情報処理演習Ⅰ」（1単位）、「情報処理演習Ⅱ」（1単位）、「日本国憲法」（2単位）、「保育の英語Ⅰ」（1単位）、「保育の英語Ⅱ」（1単位）、「体育理論」（1単位）、「体育実技」（1単位）、「現代のマナー」（2単位）、「特別活動Ⅰ」（1単位）、「特別活動Ⅱ」（1単位）、教養科目Aとして、「日本文化の理解」（2単位）、「話し方とコミュ

ニケーション」(2単位)、「音楽表現技術」(2単位)、教養科目Bとして、「人間と環境」(2単位)、「子どもに教える科学実験」(2単位)、教養科目Cとして、「英語コミュニケーションⅠ」(2単位)、「英語コミュニケーションⅡ」(2単位)となっている。

これら基礎教養科目は、本学の4つの資質・能力である「保育者としての専門的な知識と技能」「表現力とコミュニケーション能力」「責任感と協力性」「地域貢献と敬愛の精神」のそれぞれの内容について関連している。

基礎科目では、1年前期の「基礎ゼミナール」で、近隣の幼稚園児を招いた「お店屋さんごっこ」に取り組んでいる。1年次に開講される「クリエイティブ・ムーブメントⅠ・Ⅱ」は、さまざまなワークショップ等を通して、自己表現の方法や意義、コミュニケーション能力の向上をめざした本学独自の科目である。また、1年次「特別活動Ⅰ」、2年次「特別活動Ⅱ」においては、新入生研修会、クリーンプロジェクト、大学祭、ウィンターコンサート、Iwatan親子フェスタ等の各種行事や1・2年生合同集会への参加や企画運営を通して、協調性や主体性を養っている。

教養科目Aは、「日本文化の理解」「音楽表現技術」「話し方とコミュニケーション」といった社会や文化を学ぶ内容の科目がある。教養科目Bは、「人間と環境」「子どもに教える科学実験」といった自然・科学分野の内容となっている。また、教養科目Cは、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」を開講し、ネイティブスピーカー講師による授業を行っている。

教養教育で培われる「表現力」「コミュニケーション能力」「協働実践力」「マナーの習得」「文化、社会に対する理解」「自然、科学分野についての理解」「異文化理解、異文化コミュニケーション能力」は、社会的・職業的に自立できる人材の育成に欠かせないものであり、保育者養成としての専門教育科目の基盤となる。教養教育と専門教育との関連については、「カリキュラム・ポリシー」に示し、学生に分かるようにしている。例えば表現力育成では、基礎科目に設置している「クリエイティブ・ムーブメントⅠ・Ⅱ」、「体育実技」の科目で基本的な表現力を育成し、専門教育科目である「音楽Ⅰ～Ⅳ」、「図画工作Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「幼児体育Ⅰ・Ⅱ」、「表現ⅠA・ⅠB」などで、幼児教育の知識や技能習得の充実を図っている。

(2) 本学の教養教育の効果の査定

本学の教養教育は、他の科目と同様、授業担当者がシラバスの授業計画に沿って授業を展開し、成績評価の基準に従い学習成果の状況を到達目標の達成度により評価している。

教養科目の効果の査定としては、従前より、シラバスとポートフォリオとしての学習記録が一体となった本学「シラバス・学習記録」の利用、学生による「授業評価アンケート」の利用を行ってきた。「シラバス・学習記録」は、授業終了後に学生が学習記録欄に学習内容・気付き・課題等を記入し、クラス顧問がその記入状況や内容について毎月点検するものである。「授業評価アンケート」については、実施結果について担当教員が学習効果の確認、改善を行うものである。

これらの仕組みは、教養教育の効果の測定、評価という視点からは十分ではなく、改善が課題であった。そこで、平成30年度に本学が学習成果を焦点に据えたアセスメント・ポリシーを定め、ア

セスメント・ポリシーに基づいたデータの収集・分析を含んだPDCAサイクルで自己点検・評価を行うサイクルを策定した際に、「教養教育の効果の測定・評価」の仕組みを導入することとなった。この導入は、短期大学基準協会の平成30年度の改定基準¹⁾とも連動している。

本学の「教養教育の効果の測定・評価」の仕組みは、以下のとおりである。

- ①対象となる基礎教養科目の受講者に対し、受講した基礎教養科目における習得をめざす能力について、基礎教養科目の自己評価アンケートを実施、集計する。
- ②授業担当者の成績評価を数値化し集計する。
- ③教務部は、①の学生の自己評価と②の授業担当者の成績評価の数値を比較・分析し、前年度の数値との比較も合わせて授業担当者に報告する。
- ④授業担当者はそれを受けて授業改善等を行う。
- ⑤教務部は各科目の自己評価と成績評価の差の分析とともに、科目間の平均値を平準化するような授業改善の工夫も図る。「基礎教養科目成績評価・自己評価一覧」は、年1回教授会で報告をする。

平成30年度の導入より今年度で5年目を迎えるが、学生の自己評価を基にした教員の指導を通して、学生へ教養科目の学習成果を意識化させることや、課題意識を高めることに一定の効果があったと考える。しかし、年度ごとのデータの収集と分析を行うのみで、5年間の推移から傾向を見出す等の分析は未だなされていない。本研究ノートでは、基礎教養科目の成果を検討する基礎的資料を得ることを研究目的とする。なお、本研究ノートは、教務部が過去4年間、学生の自己評価及び教員成績評価について調査し、年度ごとの分析を行ってきた資料を比較、分析したものである。また、本研究ノートは、幼児教育科としての取り組みを研究グループが省察したものである。

II 先行研究について

「基礎教育科目の効果の測定」に関する先行研究について以下のように掲げておく。

小西ら（2022）が、甲南大学の共通教育センターが提供する初年次教育から高等教育で学びのスタイルを確立させるために導入した新しい学部横断型の基礎教養科目「共通基礎演習」での実践である。学生への学びの姿勢への影響に対する考察の方法として、過去に「共通基礎演習」を履修した学生に対して、授業を受けたことで学生として成長できたかを主な質問内容としたインタビュー調査²⁾では、「新しく出会った人とのコミュニケーションがうまくできるようになった」「主体的に学ぶためにはどのようにしたらいいのかが分かった」といった主旨の回答を得ている。

そこで、本学の「基礎ゼミナールⅠ」「キャリア開発Ⅰ」の科目をとおして、社会の求める問題解決能力を持った人間に成長するために、自己の学習スタイルの確立、自己の可能性、他者とのかわりによって意識しあえることで身につけていくことができよう。

また、杉本（2022）は、保育士養成課程における基礎科目「英語」の授業において、英語絵本の読み聞かせの実践と、受講学生の英語に対する意識調査³⁾を行った。絵本の読み聞かせの体験は、保育とは切り離すことができない絵本に注目し、文化・表現としての英語絵本が、学生の英語に対する抵抗感や苦手意識を払拭し、英語の基礎技能の向上だけでなく、保育者としての資質を育むこ

とや保育技術に活かせる力を育むことを目指している。

本学においても、担当教員の指導により、日本の昔ばなしを紙芝居にして英語で話しかけることで、学生同士の学び合い、意見し合うことがコミュニケーション能力を育むこと繋がることを期待している。

篠原ら（2020）は、専門基礎科目として解剖学、生理学、薬理学を看護専門科目として基礎看護学、成人看護学、精神看護学、基礎看護学実習Ⅱ、成人看護学実習Ⅰを採り上げ、それらの成績の関連性を検討した。多変量間の関連性は、正準相関分析を用いて分析⁴⁾している。各科目間の相関には、ピアソンの積率相関係数を用いている。正準相関分析の結果、二つの有意な正準変数が認められ、寄与率の高い第1正準変数（ $\lambda = .835, p < .01$ ）では、解剖学Ⅰおよび解剖学Ⅱと基礎看護学および成人看護学に強い正の相関が得られている。考察として基礎看護学および成人看護学の成績には、解剖学の知識が反映されることが示唆された。しかし、実習成績との間には関連が認められなかった。実習は、評価基準が看護過程、医療安全、態度などで構成されており、教員によって評価が異なるバイアスがあり、解析結果に影響していた可能性はあるとしている。

幼児教育の実習評価にも、思考過程や学生の実習への取り組み方などが判断されていることもあり、その影響があるといえよう。

深井（2020）は、情報スキル教育において「ルーブリック自己評価を用いた振り返り学習を実践し、それに対するアンケート調査結果から、自己評価、振り返り学習の効果を得る基盤として機能したことや、ルーブリック自己評価が学習に有効であるという実感を与えられる可能性があることを意味している。」⁵⁾と考察している。また、ルーブリック評価には得意不得意があり、学習者によって評価の的確さに違いが生じることで評価結果の妥当性の感じ方が異なることもあるため、ルーブリック評価による振り返りに対する有効感や自己評価の満足感が低い場合、モチベーションの面などで振り返りの効果が低減する恐れがあるため、こうした問題をできるだけ解消することが望ましいとしている。

そのため、ルーブリック自己評価と自分の自由な評価基準による自己評価を併用し、複眼的に総合評価するなどの方法が挙げられると考察している。

本学では、学習者によって評価の的確さに違いが生じることで評価結果の妥当性の感じ方が異なることもあるため、ルーブリック自己評価による振り返り学習の効果をさらに高める方法として、記述項目を設けており、振り返り学習の効果が現れている。

中山（2019）は、専門基礎科目における教育効果の可視化方法の開発を行い、「授業の1回目に授業全体の内容に関するテストを行い、定期試験の結果と比較することで客観的な教育効果の可視化方法を開発」⁶⁾している。受講前の学生の習熟度に依らず、学習効果の確認が行える点に注目できる。授業前の習熟度が入学年度や学生毎に異なる状況において重要であることから、学習効果の確認はランダム化試験により行うのが適切であるとしている。

この授業での教育効果を客観的に評価するために、教育効果の可視化を行っており、本学のFD・授業評価委員会の年間計画では、教育効果を学生による評価を振り返り、授業をよりよいも

のにすることと合わせ、他の教員と連携して本学全体としての教育の質の向上に繋がることを継続していききたい。

碓 (2016) は、2013年度2014年度2015年度における、奈良佐保短期大学の基礎教養科目であるキャリアデザインの授業実施報告である。必修ではないが修得が推奨されている「学科推奨科目」として前期の講義が設定されており、受講者は主に1回生（受講者数：2013年度153名，2014年度121名，2015年度117名）で、受講生自らのキャリアを主体的に描けることを目的に授業を実施している。自分の過去や現在から未来を描きだせるように自己分析や他者理解、社会に出るための準備としてビジネスマナーや就業力を理解し自らのキャリアプランニングの作成までを実施している。

その結果、経済産業省が2006年度から提唱している「社会人基礎力」（「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」）の3つの力のうち「前に踏み出す力」「チームで働く力」は、グループワークを取り入れた授業内振り返りシートや学生「授業アンケート」のコメントから関心度や満足度が高く成果はあった。一方で「考え抜く力」を要する自らを深く考える個人ワークの「キャリアプランニング」「将来の姿をみつめる」授業に対して難しさを感じているという課題が残った。今後自己理解を促す授業内容と自己探索する時間を十分にとるなどの検討を進め授業改善を行いたい⁷⁾と報告している。

本稿に記している、1年次基礎ゼミナール・キャリア開発Ⅰ、2年次のキャリア開発Ⅱ・キャリア開発Ⅲの取り組み、1年次の「おみせ屋さんごっこ」において3回のループリック自己評価のデータ分析を行っているが、1回目より2回目、3回目と各項目が向上している。

岩崎 (2014) らは、アクティブ・ラーニングを主軸とした大学生の能動的な学びを育むための学習環境のデザインを構築するための入門書を発行した。理論編では、アクティブ・ラーニングの背景、理念、具体的な手法、学習支援、評価方法について述べ、実践編では演習、多人数講義、ICTの活用、社会連携の視点から授業実践が紹介している。

Ⅲ 研究の目的

本学における基礎教養科目に対する受講者の成果獲得意識（自己評価）と教員の修得獲得意識（成績評価）をデータ収集し分析することで、基礎教養科目の成果を検討する基礎的資料を得ることを目的とする。

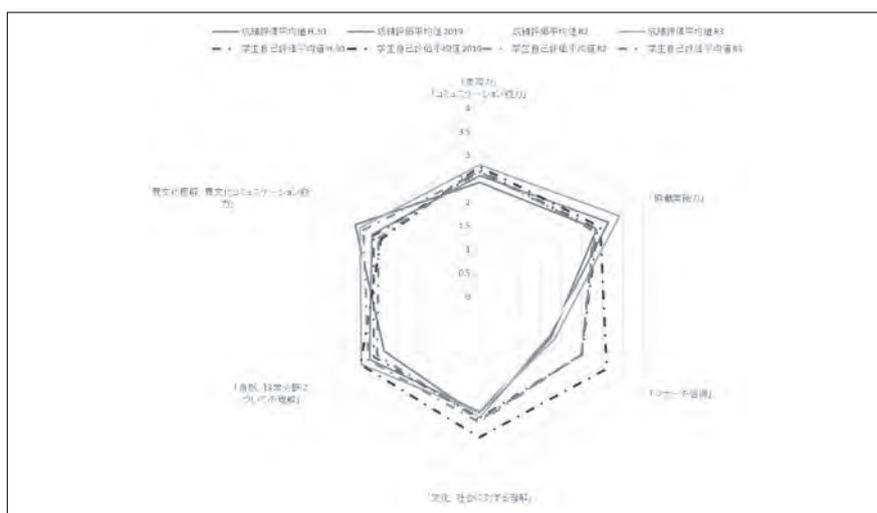
Ⅳ 研究の方法

1. 方法：記名自記式4件法択一選択式質問紙調査
2. 対象：I短期大学に在学する1年生・2年生
3. 調査対象期間：2018年4月～2022年1月（4年間）
4. 調査時期：各年度前期末・後期末
5. 調査内容：各科目の各学習成果について1～4の4件法

V 結果

1. 基礎教養科目で修得を目指す能力

過去4年間の集計では、成績評価平均値は毎年同じような成形であり、学生自己評価平均値も成形は同様と言える。本学の特徴として、「マナーの習得」の成績評価平均値が他の項目より低く、正多角形が成されない。分布図や推移をグラフから分析し、学生の自己評価による学修成果の到達度と教員の成績結果には隔たりがあることがわかる。しかし、全科目の平均値からみると、大きな隔たりはない。(成績=教員評価値2.80、自己評価=学生評価値2.61) 科目間の差があるといえる。



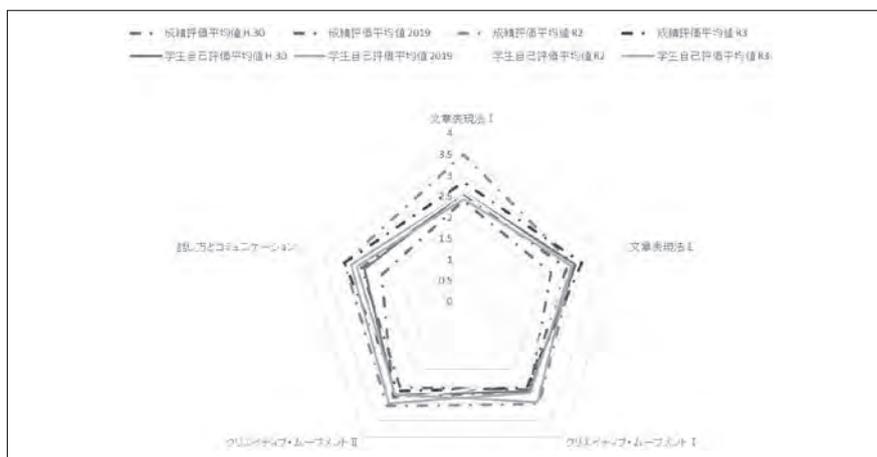
基礎教養科目で習得を目指す能力

2. 各項目について

(1) 表現力とコミュニケーション能力

【分析】科目間のバランスは取れている。各年度での差も少ない。文章表現法 I の R 2 年度の成績評価の 1 ポイント上昇が唯一の突出と見える。

【傾向】表現力・コミュニケーション能力の項目では、5 科目が均等性が成立し、バランスのよい実施状況とみることができる。

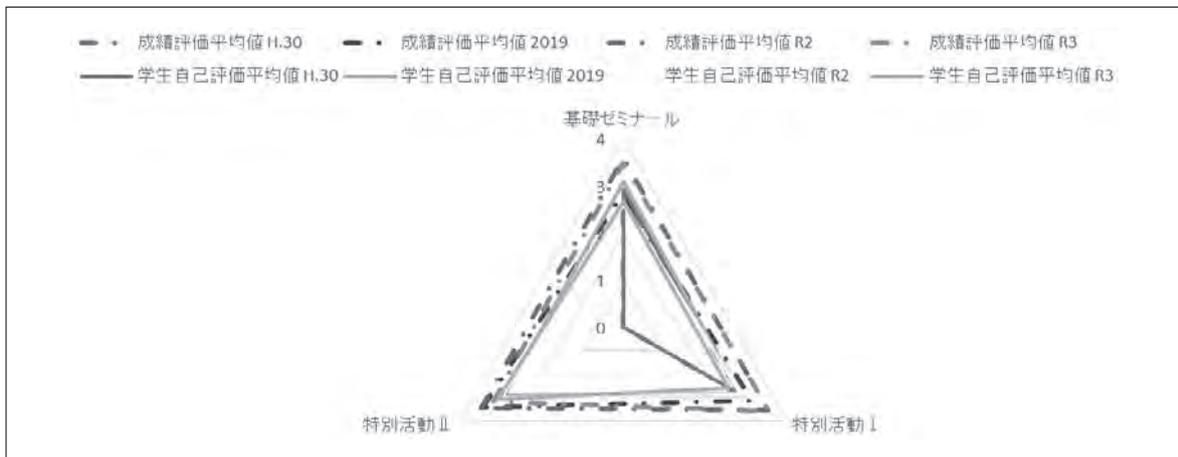


表現力・コミュニケーション能力

(2) 協働実践力

【分析】 毎年の科目間のバランスは取れている。各年度での差も少ない。特別活動ⅡのH.30年度のデータが未調査であったこと以外の突出はない。

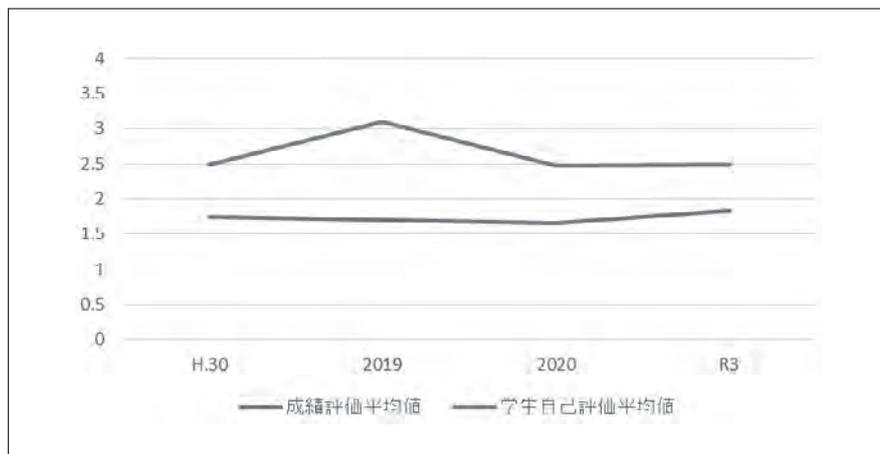
【傾向】 協働実践力の項目では、3科目が均等性が成立し、バランスのよい実施状況とみることができる。



協働実践力

(3) マナーの習得

【分析・傾向】 1科目の開講のため、推移のみの分析となる。毎年、改善点には上がり、対策を講じてきた。今年度は今までで一番差が少なくなったため、改善の成果は見られる。今後の対策としては、マナーの習得に関する授業の見直しである。1科目で担うことを再考しなくてはならない。

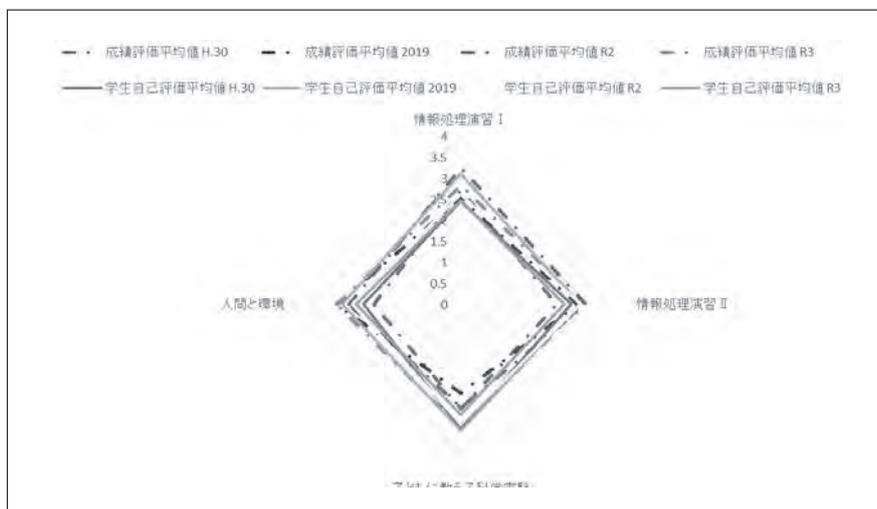


マナーの習得

(4) 自然科学分野についての理解

【分析】科目間のバランスは取れている。各年度での差も少ない。

【傾向】自然科学分野についての理解の項目では、5科目から4科目へ縮小した。4科目の均等性が成立し、バランスのよい実施状況とみることができる。

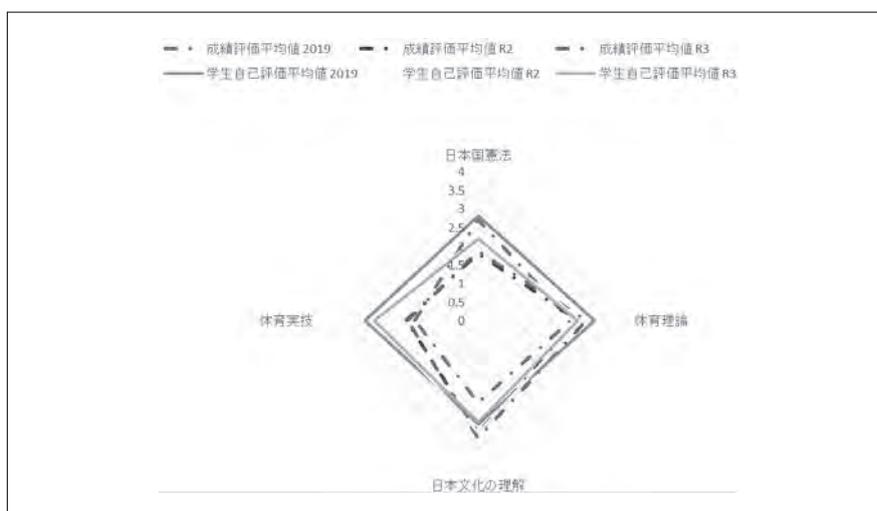


自然科学分野についての理解

(5) 文化社会に対する理解

【分析】開講科目の変化があり、データを分析することが困難。よって、過去3年間の開講実績がある4科目を仮に分析をした。他の項目に比べ、数値が低めである。自己評価では辛うじてひし形を保ってはいるが、成績評価では、体育実技での低値が目立つ。また、日本国憲法の成績評価も昨年度今年度でさらに低値となった。

【傾向】文化に対する学修はできつつあるものの、社会へ対する理解は努力を要する点であると言える。

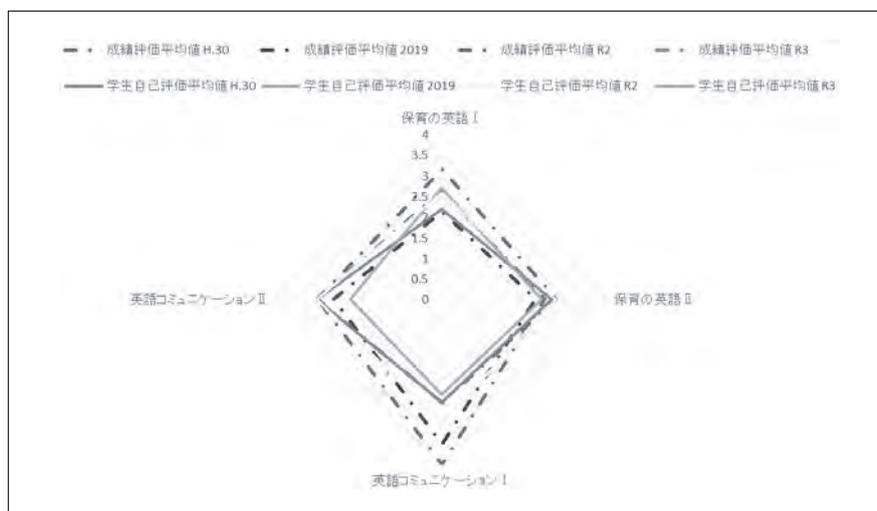


文化社会に対する理解

(6) 異文化理解、異文化コミュニケーション

【分析】当初は差異が大きかったが、科目間のバランスは取れている。

【傾向】グラフの結果から分析すると、異文化理解に消極的であったり、自信がない学生が多いと予想される。(成績評価と自己評価の差異から)しかし、英語コミュニケーションでは、履修者の少なさから、数値の変動が大きい。よって、学生の傾向を判断するまでにはいかない。



異文化理解、異文化コミュニケーション

Ⅵ 今後の課題

1. 基礎教養科目で修得を目指す能力(全体)のバランスについて

①「表現力」「コミュニケーション」②協働実践力③マナーの習得④文化・社会に対する理解⑤自然科学分野についての理解⑥異文化理解異文化コミュニケーション能力の6つの観点をバランスよく修得することを目指すのであれば、構成科目数に偏りがあることが改善点として挙げられる。

現在は①5科目 ②3科目 ③1科目 ④5科目 ⑤4科目 ⑥4科目(令和3年度)である。

③の観点は1科目のみで構成されており、必須科目であるため全学生が履修をする。この観点が複数科目で編成されていないため、改善がその科目自体の授業改善へとなり、授業者への負担にならないか懸念される。

2. 学生の自己評価能力について

自己評価をする前に、その科目で身につけたい能力については確認をしてから記載するように改善したが、毎年数人がすべて4またはすべて1などを付けている。自己肯定感の高さから、「授業をがんばった=4」とつけている傾向も見られる。これまでの学校教育での自己評価が自分自身の学習活動に関する自己評価が多かったことが原因とも考えられるが、再度、「自分自身に身についたと思える力」について自分自身が評価をするという趣旨を確認することが大切である。

あるいは、自己評価と成績評価を学生自身が確認する作業が必要なのか、再考の課題である。

3. 自己評価平均値と成績評価平均値の差異について

この調査自体が、基礎教養科目の修得のみを図るのであれば、成績評価の平均値の推移を毎年比較検討していくが、学生の自己評価の平均値を採っていることから、学生自身の「身についた力を実感する」という点に着目しているという点を、再度確認する必要がある。基礎教養科目の役割として、学士を付与するにあたり、学生に備わっていてほしい素養を修得することがある。

また、自己評価平均値と成績評価平均値を近づけるための改善ではなく、授業を実施した結果としての評価でありたい。授業者が学生への学修の満足度を高めるための努力をこの調査から多角的に捉えてほしい。授業の中で、身に付けてほしい力を具体的に学生へ伝える努力も必要かもしれない。

Ⅶ 基礎調査を終えて

基礎教養科目の効果の査定の仕組みの導入開始から4年間のデータの収集、分析により、上述の基礎的資料を得た。各項目のポイントをグラフ化し分析した結果、成績評価平均値と学生自己評価ともに同様な成形がなされ、本学の傾向を捉えることができた。また、6つの観点に応じた構成科目数に偏りがあること、学生の自己評価能力の改善を図ること、授業者が学生へ身につけてほしい力を具体的に伝える必要があることなどを課題とした。

来年度より、本学独自のリベラルアーツ教育の充実を図るため、新教養科目の追加、必修科目の変更などの大幅な教育課程の改定を行う。変更前に行った本研究は、来年度からの基礎教養科目の効果の査定に大きく寄与すると考える。今回の課題を踏まえ、改善を行うとともに、引き続き調査、分析を進めていきたい。

参考文献・引用文献

- 1) 短期大学基準協会「第三者評価実施要領」(2018)
- 2) 小西幸男(2022)「共通基礎演習」におけるアクティブ・ラーニングの実践－初年次教育授業デザインとアクティブ・ラーニングの要素の仕組－」甲南大学総合研究所叢書第146巻, pp54-55.
- 3) 杉本孝美(2022)『保育士養成課程における英語授業の役割－学生の英語学習に関する意識調査を踏まえて－』大阪総合保育大学紀要16, pp15-21.
- 4) 篠原幸恵, 吉村裕之(2020)『正準相関分析を用いた専門基礎科目と看護専門科目との成績間の関連性』人間環境大学松山看護学部紀要「健康生活と看護学研究」第2巻, pp15-16.
- 5) 深井裕二(2020)『情報基礎科目におけるルーブリック自己評価のデータ分析』北海道科学大学研究紀要, (48), pp168-170.
- 6) 中山泰宗(2019)『専門基礎科目における教育効果の可視化方法の開発』崇城大学紀要第44巻, pp226-230.
- 7) 碓 ともみ(2016)『奈良佐保短期大学におけるキャリアデザイン科目授業実施報告』奈良佐保短期大学研究紀要23 pp29-31.

岩崎千晶編著（2014）『大学生の学びを育む学習環境のデザイン—新しいパラダイムが拓くアクティブ・ラーニングへの挑戦—』 関西大学出版部.

令和4年度 卒業生対象保育実践研修会 報告

子ども未来保育研究所

Report on the 2022 Practical Childcare Workshop for Graduates

令和4年度子ども未来保育研究所主催、「卒業生対象保育実践研修会」が、令和4年8月21日（日）に岩国短期大学講堂で行われた。本研修会は、本学の卒業3年目の卒業生を対象として彼らの就業状況の把握、ならびに離職率の低下を防止することを意図として開催され、令和4年度が3回目の開催になる。

研修会では、「保育実践」にふさわしい保育現場に役立つ内容を提供することを心掛けており、参加者同士が共に仕事への意欲と意識向上がもてることを主な目的としている。また、研修会の案内要項は近隣の幼稚園、認定こども園、保育園、施設にも配布して、本学及び本研究所の取り組みを広報している。

昨年（2021）は新型コロナウイルス感染症拡大の影響が大きく、WEB研修会になったが、今年度は年度早々から講師、東田勇斗氏の紹介があった。

昨年の反省点として、参加者が微数であった要因の一つに、研修内容の見直しが上げられていた。従来の講話だけではなく、よりイベント的な要素を絡ませたものや、共催として大きな行事の中で開催するなどの改善案が検討された。その検討直後に、スポーツトレーナーの東田勇斗氏がリズムジャンプを広めていることが紹介され、令和4年度のワークショップ型研修として提案された。このスポーツ要素の高い研修案には、従来の一方向型研修会とは異なった新鮮さが感じられ、満場一致で採択された。

（1）研修会の内容

演題 「トレーナーから学ぶ幼児と楽しむリズムジャンプ」

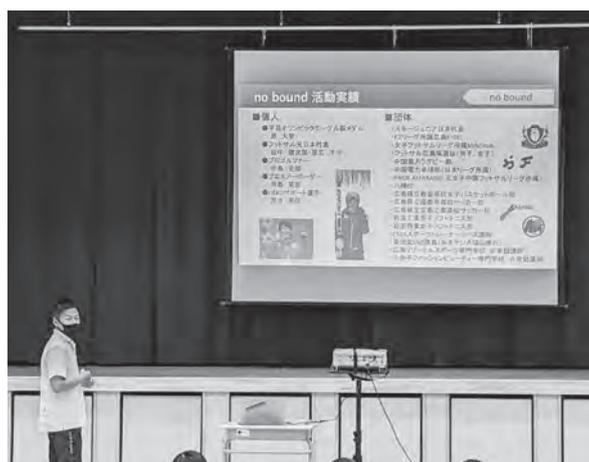
	研修会開催宣言
	講師紹介
1	リズムトレーニングって何？ 「リズムトレーニングピラミッド」の説明 ・リズムジャンプ ・リズムサーキット ・種目別トレーニング
	幼児応用編

	各現場での実践例
2	指導に入る前のころえ 実技指導 ・基礎ステップ ・リズムの変化 ・手の振りをつける ・コンビネーションステップ ・道具をプラスする ・周囲への視線をプラスする
3	まとめ 謝辞

講師紹介

東田勇斗先生

岩国市在住。日本トレーニング指導者協会認定トレーナー、スポーツリズムトレーニング協会認定インストラクター他。no bound代表。F2リーグフィジカルコーチの経験を持ち、個人競技者や広島県内や岩国市内の企業チーム、高校の部活動からプロ契約選手まで広くトレーニング指導などを行っている。広島リゾート&スポーツ専門学校他非常勤講師も務めている。



研修会前半は、パワーポイントで資料を提示され「リズムジャンプ」の効果について話された。現在、全国約300園で導入されており、各年長児、年少児共に20m走、立幅跳び、跳び越しくぐりにおいてその効果があること、さらに、小学低学年の認知能力は、ジョギングよりもリズムジャンプの方がその効果が高いことも示された。また「リズムジャンプ」導入後、小学生の切り傷、捻挫、打撲での保健室利用者数が減少したことも示され、柔軟性や機敏さへの効果関連を示唆された。

後半は、実技指導を受けた。最初は、参加者全員が談笑しながら、ステップを踏んだり軽く走ったり身体を動かしていた。身体が慣れてきたところで、東田講師のリズム乗りとジャンプの高さや手の振りの連動を加えた指示が入っていく。ステップが複雑になるにつれ、集中力と真剣さが感じられ、どの参加者も息が上がり、口々に「きつい！」と叫びが上がっていた。また講師の手拍子と掛け声に合わせて中断することなく汗まみれになっていた。

実技指導の合間に、大人と異なる幼児の各ステップの様子や、幼児向けにステップを踏ませるときのコツなどもご指導していただいた。



実技指導（基礎ステップからコンビネーションステップへ）



付記：倫理的配慮

本報告書に掲載されている写真は、ご本人の承諾を得ています。また本アンケートによって得られた情報についても、個人が特定されないように保護して掲載しています。

資料 令和4年度第3回 岩国短期大学卒業生対象保育実践研修会 アンケートの結果

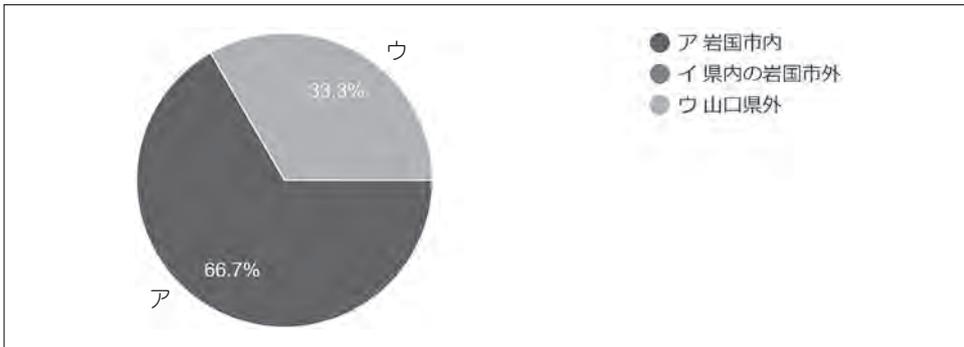
I アンケート回収率 50% (6名)

II 令和4年度 卒業生対象保育実践研修会 アンケート回答について

1. 本学卒業生の方へ 卒業後何年目なのかご記入ください。(5件の回答)

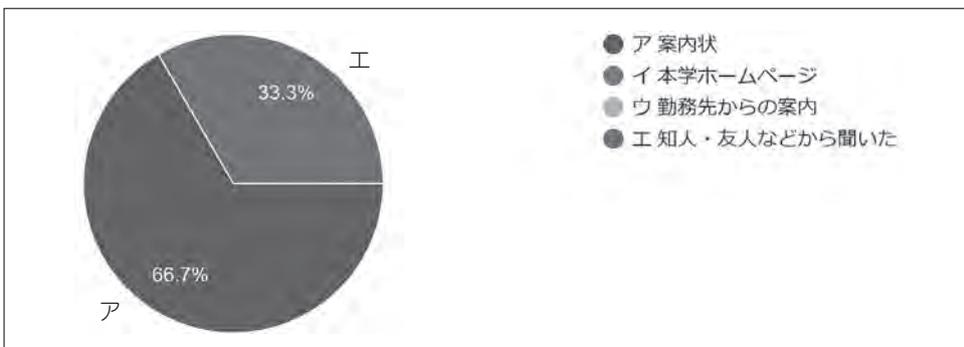


2. どちらから来られましたか。(6件の回答)

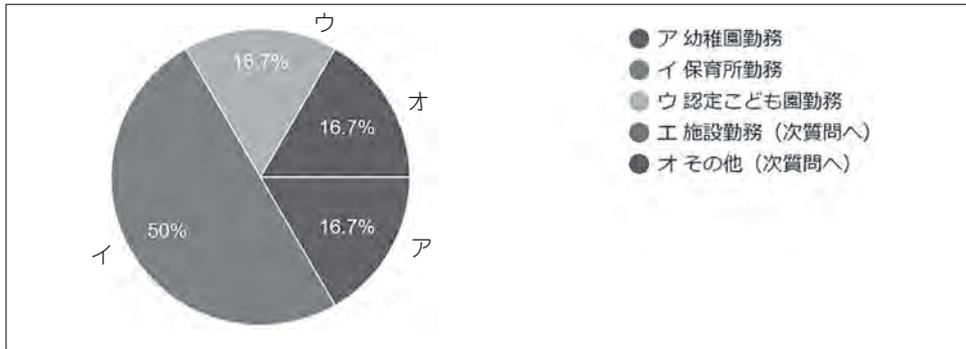


3. 本日の研修会をどちらでお知りになりましたか。あてはまるものに全てマークしてください。

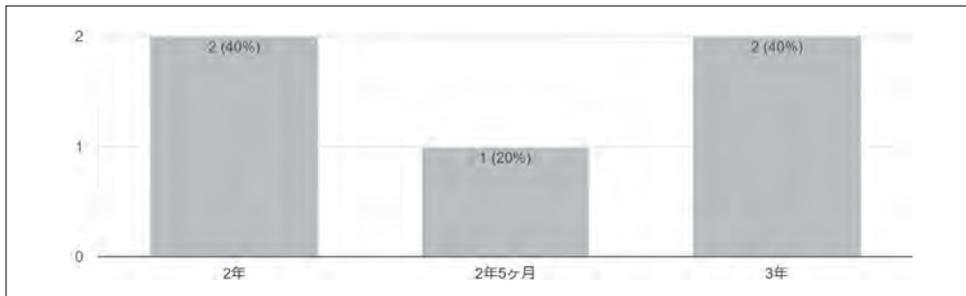
(6件の回答)



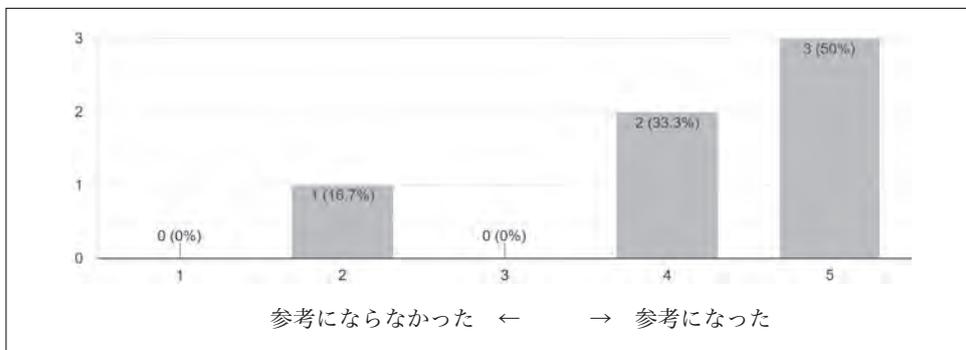
4. ご勤務先について、マークしてください。(6件の回答)



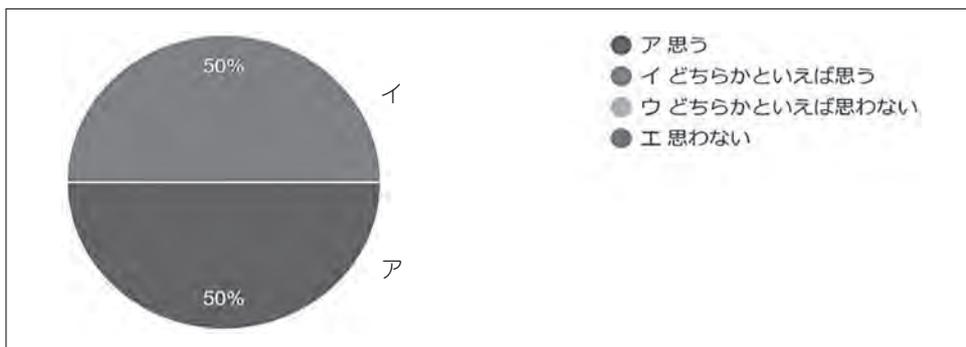
5. 現在の勤務先へは何年お勤めですか。(5件の回答)



6. 本日の研修会は、これからの仕事の参考になったと思いますか。(6件の回答)



7. 今後このような研修会が開催されたら参加したいと思いますか。(6件の回答)



8. 本日の研修会の企画・運営について、ご意見ご感想をお聞かせください。(今後、開催してほしい研修内容等)

- ・リズムジャンプを体験するのが初めてだったので疲れたけど凄く楽しかった。
また、教えてくださる先生がとても面白く優しく明るかったので楽しい雰囲気で行うことが出来たのがすごく良かった。
- ・先生の指導する際の声掛けや褒め方もすごく参考になりリズムジャンプを職場でも機会があればぜひ実践してみたいと思った。
- ・同期と研修をすることが出来てすごく楽しかったです！このような機会をいただきありがとうございました！
- ・久しぶりに学生に戻ったような感覚で、楽しく学ぶことができました。
- ・参加させて頂きありがとうございました。

編 集 委 員

正 長 清 志

井 上 美 佳

荒 谷 容 子 (委員長)

岩国短期大学紀要 第51号

令和5年3月1日 発行

編集者 紀要編集委員会

発行者 岩国短期大学

岩国市尾津町2丁目24番18号

印刷所 山口印刷工業株式会社

BULLETIN OF IWAKUNI JUNIOR COLLEGE

NO. 51
2022

CONTENTS

- Research into the Effects on Education at the University Level during the Spread of the Novel Coronavirus Disease (2)
—From the Graduation Questionnaire for Students Entering the 2020 Class of Childcare College—
Aratani Yoko · Tomita Masako 1
- Acceptance of the Delsarte System of Expression in Japan
—From the Trajectory of Acceptance of Ichikawa Sadanji II and Kikuo Shirai—
Inoue Mika 11
- A Practical Study of Singing Instruction at a Training School for Nursery School Teachers
—A Study on Problem Solving from the Viewpoint of Research on Singing—
Akagawa Yuko 22
- A Study of Teaching Wall Displays at a Childcare Training Schools
—A Study of the Practice of Teaching Modeling Expression—
Mukoyama Itsuko 32
- Associations Considered Based on Child Care Students' Preferences for Organisms and Exercise
—Based on a Survey of Students' Attitudes Toward Insects, Small Animals—
Kuinaguchi Youichi 38
- Reports of Kodomo Mirai Hoiku Kenkyu**
- Research on Measurement and Evaluation of the Effectiveness Basic Liberal Arts Courses
—Self-inspection and evaluation through the PDCA cycle, including data Collection and analysis of learning outcomes—
Asakura Nagisa · Shounaga Kiyoshi
Inoue Mika · Shimoyama Kiyoko 47
- Report on the 2022 Practical Childcare Workshop for Graduates
Kodomo Mirai Hoiku Kenkyujo 58
-